

日中友好烈烈

——訪中学術紀行——

清水嘉治

一、「学術招待状」を受けて考える

二、深まるシンポジウム

①長春の活力

②私たちの研究報告

③工場見学と歴史博物館で考えたこと

④日本の中国侵略を忘れてはならない

⑤長春の自由市場とまちづくり

⑥吉林省と吉林大学で考える

三、瀋陽のまち、遼寧大学日本研究所のこと

四、北京大学と北京のまちで考える

五、神奈川県を訪中団に参加して

——瀋陽・大連で、県・省の友好関係を見る——

①改めて北京で物価問題を考える

②「一人っ子」政策について

- ③ 神奈川県と遼寧省との友好五周年事業に参加する
- ④ ミス白山号（ニューススタイルの自転車）について
- ⑤ 港灣都市、工業都市、生活都市としての大連
- ⑥ 大連開発区の企業導入法を考える
- ⑦ 外国企業の優遇措置について
- ⑧ 日中友好提携を深めよう

一 「学術招待状」を受けて考える

一九八八年一月十三日、中国吉林省社会科学院から私たち四人（海道勝稔、梶村秀樹、池上和夫の各教授と筆者）に、「中国東北地区日中経済協力問題」について学術討論会を開きたいから協力して欲しいという招待状が来た。この背景には、本学経済学部の研究員として来学された金泰相（吉林省社会科学院日本研究所副所長）氏の配慮があった。昨年十月下旬頃だったか、私たちは、金氏を迎えておきながら、日中学術交流を主体的に考えていないのではないかという反省から出発した。

経貿研の地域経済研究会で、ある教授から日中友好の学術交流を具体化しようではないかという話がでた。わたくしは、この提案に賛成した。

そのため、私たちの専門研究を踏えて、吉林省の社会科学院での学術シンポジウムに参加することにしたのである。もちろん、準備にもっと時間をかけたいとおもった。

だが、その時間がなかった。各専門分野の意見を直接ぶっつけることによって交流を図ってはどうかという点で、私たちは一致した。

こんな私たちの話が金泰相氏に伝わった。わたくし自身、直接金氏に伝えた。それが、このたびの招待状の直接の契機になったようである。いざ招待状が来ると、不安であった。「日中学術交流」の具体化のテーマとして「日中経済協力のあり方」「東北アジア地域の経済協力の問題」もあったからである。この点を、訪中までに梶村教授を中心に研究会を持って理解を深めた。四人が一致したのは地域に根ざした日中学術交流をするという点であった。さらに四人の研究テーマは、違うが、交流にあたって、専門分野の研究を通じて、先方の社会科学の研究者と同じテーブルで、「東北アジア地域の経済協力」をどう発展させるかを考えるという点でも一致した。

こうした経過を踏えて、私たちは吉林省社会科学院の招待を心良く受け入れることになったのである。ともあれ、出発までに、数回密度の濃い研究会を持って意見の交換をした。その中で、各人が現代中国経済問題についての主要な文献を研究することにした。それぞれの課題を各人が自らの課題として参加することにした。というのは、私たちの大学の教育・研究が多忙のために、出発するまでに共同作品を問う時間的余裕がなかったからである。四人のそれぞれのスタンスを前提に日中学術交流をするということにした。

わたくし自身は、最近の中国経済の激しい変化に、注目していた。一九七八年一二月、中国共産党は近代化政策を選択し、以後約一〇年を経過した。この間の中国は、開放政策と経済政策を定着させてきた。開放政策は、一九八四年一〇月「経済体制改革に関する中国共産党の決定」に基づき、「計画的商品経済」論を根拠に展開した市場経済の承認であり、ユニークなものであった。この開放政策は、従来のソ連、東欧の計画経済とも違ってある。この点をどう評価するかであった。この問題はあとで展開する。一方経済政策では、農業における生産責任制の導入による農業生産制を高めたこと、この中で、都市近郊農村と純農村との格差の問題をどうするか、を課題とした。この点、従来の社会主義的計画経済と商品経済を対立させる価値規準を克服している。それは、従

来の社会主義における生産力の停滞に対する厳しい反省からきているとおもう。

ソ連にしろ、東欧にしろ、共通の社会主義国でありながら、本来卓抜な生産力の優位性を示すはずであった。ところが戦後四十年を経過しているにも拘らず先進資本主義国の生産力の三分一または四分の一以下の水準に留まっているのはなぜか。この点は、社会主義経済学者のみならず近代経済学者などがもつとも疑問としていたところである。中国が、社会主義の根本任務を、生産力の発展にあると踏み切った点に注目したい。レーニンではないけれど、社会主義こそ貧困をなくし、人民の生活を豊かにする制度であり、教育水準を高め、福祉水準も高める制度として宣伝されてきた。敢えて繰り返すが第二次大戦後四〇年以上を経過したソ連、東欧の社会主義国は、依然として生産力が低水準にあり、発展途上社会主義国ではないか。この点、中国が独自に開放政策を目指した理由を読み取ることができる。

中国が四つの基本原則である、①社会主義の道、②人民民主独裁、③党の指導、④マルクス・レーニン主義と毛沢東主義を踏まえて社会主義国における生産力優先主義を敢えて選択した理由はなにか。それは人民の貧困からの解放であり、人民の生活水準を向上させ、豊かな文化生活をすることにあるとおもった。

こうした大きな問題を、中国の人民の生活に求めることは、重要なことではないか。それだけではない。「日中友好」を改めて、学术交流に求めることは、自らの経済学の課題とすることではないかとおもった。もちろん私たちは、日中学術交流、東北アジア地区の経済協力の問題を、吉林省の社会科学研究所、吉林大学の教授たちと自由に対話することを通じて認識したかった。

こんな気持で招待に応じたのである。

二 深まるシンポジウム

① 長春の活力

わたくし自身、こうした問題意識をもって吉林省の長春にある社会科学研究所、吉林大学のシンポジウムに参加した。この点の事実経過については、海道教授のレポート（本学経實研編集の『研究者の窓』第七・八号）を参照されたい。

私たちは四月二十九日、午前一〇時発のJAL七八一便に乗るために、前日二十八日、成田のホテルに宿泊した。同僚のある教授は、当日、大学での講義を済ませ、午後一時頃到着した。私たちは直ちに四人で、中国行のミーティングを二時間近くもった。わたくし以外は、皆意気軒昂である。講義と研究を出発寸前までやるとは、まさに日本的である。さらにこんなに夜遅くまで真面目に討議することは、わたくしにとってめずらしい経験である。二十九日朝七時三〇分に成田のホテルを出発し空港に七時五〇分に到着し、出国の事務手続を済まし、九時近くに出国待合室に落ち着いた。少し厳粛な時間が続いた。成田空港の待合室の混雑ぶりも初めて体験した。四人のうち一人でも、離れると見つけるのにかなり時間を要するほどであった。出発にあたって連休始めの日であるからか、空港待合室はさまざまな団体客、個人客でごった返すほどの混雑ぶりであった。

午前一〇時一六分、日航機は少し遅れて出発した。機内は満席であった。機内食は、朝食を十分にとっていないせいか、おいしかった。機内では、リラックスの気分になっているつもりであるが、機内特有の緊張感におそわれる。約四時間で北京空港に着く。

北京空港での出国事務を終え、待合室の入口に、中国国際旅行社の通訳・案内人である馬志昇氏と北京大学・

大学院生の立石昌広君が迎えにきてくれた。手際よく旅行社のバスにのり、一路緑溢れる柳のアーケードの中を走り、市街を経て、市内の北部にある北京大学に着く。馬氏と立石君の二人の案内で、北京大学に入り、立石君から北京大学の図書館、経済学部、大学院の実情をきく。ここでも、小さなシンポジウムが始まる。「中国経済とは何か」「中国人の生活と大学」「日中友好のあり方」などについて討議する。北京大の図書館前の毛沢東の銅像がこわされているのをみて、どうしたのかとおもった。中国解放と統治の歴史的首領としての毛沢東を、北京大学はどう見ているのか。図書館の前の美観のためという理由で、毛沢東像を整理しているのか、理解に苦しむ。これも中央政府の指導方針の変更なのか。いまここで書くのはやめる。それは北京大学自治の問題なのだから。民族飯店に着いて、ホットする。旅の疲れは心の疲れでもある。クルマで見る北京の古い住宅と新しい高層ビル、自転車に乗って通勤している人の群、悠然として歩いている人の群、静かに生活している人民のまち、……すべてがカルチャーショックなのだ。——もちろん、ヨーロッパやアメリカに旅したときよりも限らない親しみ感をもちながらも、その国の特性に対して、カルチャーショックを受ける。中国、それは偉大な国である。大半の人民の生活は貧しく質素に見えるけれども、未来をもった逞しい人間の国であるという印象をもった。中国における古いものと新しいものの同時的共存を、この目でみた。

北京は、中国人口十一億人の政治経済社会の中心都市である。北京市は華北省の北側にあり、市内九区郊外九県からなる。北京市は、中央直轄市であり、人口九五〇万人ときく。北京市への外国旅行者は年間約一〇〇万人であるという。一九四九年一〇月一日、毛沢東中国共産党主席が、天安門上から中華人民共和国の誕生を宣言し、北京は中国の文字通りの首都なのである。

北京大学でのシンポジウムを終って、民族飯店に一泊する。ここには、日本の大手の商社の事務所がある。横

浜銀行の事務所もあった。それに日本の朝日、毎日、読売などの新聞も売っていた。(あとでわかったことは、北京飯店その他の私たちの宿泊したところには、「人民民報」「チャイナ・デリー」などがあったが外国新聞はなかった。)

四月三〇日、朝七時に民族飯店を出る。

国際旅行者B君の案内は、落着きはらっている。私たちが大学教授と思ったのか、それとも「百聞は一見に如かず」ということなのか、市内の説明をあまりしない、空港に着く。長春行の中国民航機に乗る。満席で、全席が禁煙席である。スチュアーデスのサービスもまあまあである。十二時四〇分に着く予定だったのが一時過ぎになる。B君が「中国民航機は、いつも、遅れて出発する。もう慣習になっているみたいだ」という。北京から六五〇キロ離れた北の都市長春まで所要時間一時間二〇分である。

長春空港に着くと、金泰相さんを始めとする吉林省の社会科学学院の方々と中国国際旅行社長春分社の張玲さんが出迎えにきてくれた。金さんらの歓迎に敬服する。風が強く頭髮を両手でおさえてもおさえきれなかった。金さんに感謝の礼を述べる。「蒙古の方からの強風で、よく吹くのです」という。

長春は、中国東北の松遼平野の中部に位置し、吉林省の首都であり、市街区の面積は百五十八平方キロメートルで、人口は百二十万人という。空港から市内までは約三十分程度で、途中、六車線の広い道路の両側には、松、柏、柳などが植えてあり、緑のアーケードを形づくっていた、長春は一九四八年十月に解放され、いまや一大工業都市であり、文化・学術都市である。第一自動車工場は、有名な「紅旗」を作っている。最近では、西ドイツのフォルクスワーゲン(VW)と生産技術提携をしている。三万台の生産を目標にしているという。この工場生産するのはVWのアウトディーン〇〇と二〇〇で、VWが生産技術とともに当初は車体などの主要部分を供与し、徐徐に国産化すると聞いている。その他、客車車輛工場、トラクター工場、紡績工場、時計工場があり、生産に

つぐ生産にもえているという。

一方、吉林大学があり、もともとハルビンにあった東北行政学院が発展したもので、一九六〇年一〇月、中国政府の要請で、総合大学となり、北京大、南海大、武漢大に次ぐ、中国第四の名門大学になったという。学生数約七五〇〇人で、自然科学、社会科学の専門研究の大学院だけでなく、物理、化学、先端技術関係の研究機関をもっている。経済・経営学部の外に十七の学部、たとえば、数学、物理、化学、電子工学、コンピューター科学、分子生物学、中国文学、歴史学、経済学、国際経済学、経済経営、経営科学、法学、哲学、政治学、外国学、文学などの学部をもち、まさに総合大学である。こうした大学を基軸に、文化・学術都市を目指している。長春市の西南端には、かつて日本帝国主義時代の「満州」映画株式会社があり、この会社は、一九四六年国民党反動派によって破壊され、解放後、中国人民政府の手で、再建され、いまは「長春映画製作所」となり、すでに、三〇〇本以上の映画を作っているという。

長春は、将来活力と魅力のあるまちになるであろう。私たちが見たところ、いま開発に無我無中であり、まだまだ都市づくり、景観などおこなっているとおもった。古いまちなみと新しいまちなみの「共存」をどのように作っていくかを考えながら、わたくしは十二階建ての長白山賓館を根城とする旅人になった。

北京の民族飯店でもそうだったが、長春の長白山賓館でも、部屋は、ツインルームであり、私と海道教授は一〇階の三号室に、梶村、池上の両教授は同じ階の六号室に案内された。日本の中程度のホテル並である。この日も予定はつまっていた。午後三時半から経済学専門のシンポジウム。夜は社会科学学院の歓迎宴があった。院長の万欣先生、副院長の呂欽文先生、金先生らが出席した。すばらしい料理にあづかった。私たち一同感謝の念で一杯であった。

この研究スケジュールの中で、一時間程の自由時間を利用して市内見学をした。自転車利用の勤労者の群、国営市場と自由市場を垣間見て、計画経済と商品経済の競争と協調関係考えた。午後十二時過ぎ旅の疲れであろうか、安いウィスキーをのんで就寝。熟睡。

五月一日(日)、中国のメーデーはすべて休みである。いいことである。労働者が自己の権利を獲得した歴史的記念日である。私たちは、八時に起床、朝食。そして各人長春市の概況を読む。午前一〇時、金さん来館。わたくしは昨晚の歓迎宴に対してお礼を述べる。張さんも案内役として来館。私たち六人はホテルの南方にある縁あふれる南湖公園を散策する。子ども連れの家族、人民服の中老年男女、カラフルなワンピースを着た若い女性、ジーンズの青年、とにかく、色彩りどりの服を着たひと、ひと、ひとの群れ。ただ圧倒されるだけである。公園をよく散策し、考えた。どうして、広大な公園に、ベンチや子どもの遊び場をもっとおかないのであろうか。小さなガーデンシヨックである。わたくしは、公園のあり方を考えた。みんながもっと、楽しむ参加型の公園にし、子どものニーズをみたす遊び場を沢山作ってはどうかとおもった。

この公園は、毎朝、出勤前に、有名な中国式体操である、太極拳をやるひとで、一杯になるという。午後、はじめての自由時間である。各人、洗濯やら、身廻りの整頓やら、家族や友人への手紙やら、シンポジウムのノートの準備やら……で休みといえども、働きばちのように動いた。

こんな仕事を終って、ある教授から散歩の提案があった。あとの三人も賛成し、四人で長白山賓館の前からトロリーバスに乗って、長春駅に行く。やはりひと、ひと、ひとの群れである、若い男女、家族連れ、お年寄り、三世代の人の群れである、駅から、街の中を四人でぶらりぶらりと歩き、歩きながら人間ウォッチングである。休日でも、何軒かの店は空いていた。わたくしは、小さな本屋と薬屋に立ち寄った。薬屋で、肝臓のくすりを

買った。こんなとき、漢字をかけば、すべて対応してくれるが、中国語を読める梶村さんにお世話をかけた。よく歩いた。国営市場を見たり、自由市場を見たり、「一万歩」以上歩いて、わたくしだけ体調がよくないので、三人と別れて、バスに乗ってホテルに帰って休んだ。バス料金は一角(三円四十銭)であり、車内は、うすよぐれていた。夕食のとき、自由時間の中で、長春の印象をみんなで語りあった。その会話では、長春の市民は質素で、礼儀がよいという点で一致した。さらに、市内のあちらこちらにある旧住居の「低所得層」街をみて、これからの「まちづくり」に期待をもったのである。この散歩で印象的だったのは、長春駅に行ったときである。三百人近くの人が待合室で、夜行列車を待っている姿であった。静かであり、質素な身なりで、じっと夜行列車(硬座車)を待っている光景に、異様な感じを受けたのである。さらに硬座車の待合室のトイレに入ったときは少し驚いた。男女の区別はしているが、男性のトイレも、大・小とも別れているが、大きな用をたすのに、外側のしきりがないのである。慣習の違いなのかなあと思わずにいられなかった。污水处理や下水道の整備をどうしているのか。長春の夜は暗い。電気の節約なのかも知れない。あとで、関係者から電力の極端な不足の話を聞いて納得した。

五月二日、長春の習慣では、メーデーの翌日も休みであるが、私たちと社会科学研究所の所員にとっては、シンポジウムの一日である。午前八時三〇分から一時三〇分まで社研で、院長の万欣教授の「中国の開放政策について」のレポートを中心に学術討論会を持った。万欣教授の報告は、前半において、吉林省社会科学研究所の概況を説明し、後半において、「中国対外経済開放政策の基本的趨勢と現状」というテーマの報告をした。万欣氏は温厚な紳士であり、余裕をもった研究者であると同時にステーツマンでもあった。

報告の前半では、研究所設立三〇周年で、文学、歴史、哲学、経済、法律などの人文、社会科学研究所をはじめ、朝鮮、日本、ソ連の各研究所など一〇の研究所をもっているという。研究員は三〇四名であり、いま重点を

おいているのは東北アジアの研究である。この点で、神奈川大学の経済貿易研究所も協力して欲しいという要請を受けた。その他、吉林大学との関係、古代、中世、近代の歴史資料・文献についての紹介だけでなく、日本帝国主義時代の非公開の資料があることを聞いた。あとでこの資料について興味をもったので、是非拝見したいといったが、未整理の理由で、駄目だった。

報告の後半では、中国共産党の一九五〇年代のアメリカ政策への批判、一九六〇年代のソ連の権力主義的政策への批判、一九七〇年代の「文革」への反省などを要領よくまとめた。本論にあたる一九七八年の「近代化路線」すなわち、農業の生産性の向上と、都市市民の生活水準向上の開放政策を事実に基づいて理路整然と説明した。とくに東北地区の経済発展は対内外的には市場原理を導入に、計画経済を豊富化し、対外的には隣接地域間の貿易を拡大すると主張した。金泰相氏の通訳は、見事であり、解説も、わかりやすく、整然とした日本語になっていた。金泰相氏は、同研究所の副所長の要職だけでなく、中国の日本経済学会の常務理事であり、吉林省の日本学会の副理事長であり、日中友好のかけがいのない要職にある方で、きわめて、誠実で、人間的な紳士である。これまで、日本を代表する大学教授、実業家、インテリがどれだけお世話になっているかを聞いて、改めて、同氏に敬意を表したい。

万欣教授のレポートについて、私たちから、質問をした。要約すると、「計画経済と市場経済」の両立問題を、どのように解決するか。対外経済開放の将来の見通しはどうか。市民的ニーズに対応した、社会科学の「体系」をどう作るかなどであった。とにかく、緊張した三時間であった。

午後は、吉林省政府の経済研究センター都市開発部主任の杜少先氏から「東北地区経済発展の現状」の報告があった。吉林省を中心とする経済政策の発展を詳しく述べた。ここでは省庁のマスタープランにおける経済の活

性化政策を、開放政策との関係で展開した。科学技術文化の発展を通じて、吉林省の活力ある経済を実現し、市民ひとり当りの所得を増大させることを目標に、さまざまな政策を立て、実行しているという。現場と密着しているせいか、きわめて具体的な提案も聞いた。

社会科学院の院長、吉林省の幹部の報告に、共通していることは、経済開放政策の中で、いかに生産力を増大し、市民の生活水準を向上させるかにあった。このため、東北アジアの経済協力の研究組織の実現を希望していた。二人とも、きわめて真面目であり、わたくしが「もっと余裕をもって、やってはどうでしょうか」といったら、参加者は爆笑した。

このシンポジウムの中で、私たちはいくつかの質問をした。社会資本充実の問題、計画経済と市場経済のあり方、市民参加の問題など、シンポジウムは、かなり高度な内容のものであった。

杜氏の報告を質問を入れてまとめるところである。長期計画の中で、省に存在する資源の有効利用を図り、都市と農村の同時的発展を考え、市民と農民の生活水準の向上を目指しているという。とくに都市部においては、遼東半島の資源を活用し、開発計画を考え、科学技術と社会資本を結びつけ、さらに外国企業の資本と技術を導入し、工業の発展を考えているという。省政府は経済開放政策の具体化に取り組んでいる。都市計画については、住宅、電力、下水道など都市基盤整備をめざして住宅建設をしているが、資金不足に直面し、この問題をどう解決するかが今後の課題であるという。

杜氏の報告は、省政府の第一線で活躍しているからであろうか、具体的な問題をどう解決しているかを中心に示され、かなり説得力をもっていた。わたくし自身、環境問題やまちづくりの手法などについて質問した。

② 私たちの研究報告

五月三日、午前八時三〇分から一二時まで社会科学学院で、梶村教授が「日本企業の海外進出動向と中国への関心」をテーマに報告し、わたくしが「世界経済の中の日本経済の課題——地域、自治体の視点から——」というテーマで報告した。梶村教授は第一に日本企業の海外直接投資の一般的趨勢を、公的な資料に基づいて、資源、労働力、市場指向という範疇で示し、さらに日本企業が円高に伴う近隣アジア諸国への生産拠点を移動させていると述べ、第二に日本企業の中国向け直接投資の動向と問題点を示し、第三に日本企業の労働力指向と中国経済にとつての外貨獲得効果と雇用増大効果を実証的に示し、さいごに日本企業の中国への関心と日中経済関係の展望について報告した。

わたくしは、第一に一九八〇年代後半の世界経済の特徴を述べ、とくに日・米・欧の貿易不均衡が途上国における累積債務の増大と結びついているメカニズムを示し、第二に、アメリカ経済に組み込まれている日本経済は、一方で生産力一流の国民経済を作りあげたが、同時に国際的にみて主要食料品の高騰、土地価格の高騰、社会保障費の低水準、教育費の個人負担増、巨大企業と中小企業の賃金格差構造などにみられる国民生活の二流現象を実証的に示し、経済一流国家と生活水準の二流国家の矛盾の構造を中心に報告した。

右のような問題意識のもとに、世界経済における日本経済の今後のあり方、日本と中国との経済協力のあり方、日本と途上国との経済協力のあり方を具体的に報告した。

海道、池上両教授は、私たちの報告を補足する形で、コメントをした。社会科学研究所の教授からは、日中の経済協力をさらに発展するためには、黒竜江省、吉林省、遼寧省、南北朝鮮、日本を含めた「東北アジア経済協力」を考えてはどうか。またそのため共同研究体制を作ってはどうか。また中国の開放政策と日本の経済協力のあり方の問題、日本の科学、技術と生産力の問題などへの質問と意見が多くでた。このシンポジウムでは、通

訳を勤めた張玲さん、金泰相さんに改めて感謝しなければならない。張さんは、一〇日前からわたくしの報告書を翻訳していたという。彼女の努力ぶりに敬服した。

午後は、吉林大学国際経済学部での公開シンポジウムで、海道教授が「戦後日本資本主義の再生産構造」というテーマで、池上教授が「戦後日本の国家財政の変遷と構造」というテーマで、それぞれレポートをした。

海道教授は、戦後日本資本主義を支えた生産財生産部門と消費財生産部門がいかに不均等に発展したか、同時にその構造矛盾が、大企業と中小企業の格差の拡大再生産をもたらし、一方における日本の大資本の強蓄積は、国家財政の赤字、労働者、国民生活、環境の犠牲において可能であったことを実証的に、同時に論理的に展開した。池上教授は、一九六〇年代の日本経済の高度成長期、七〇年代から八〇年代前半の「低成長」期の国家財政の構造変化を実証的に示し、とくに六〇年代の重化学工業優先政策のための国家財政を性格づけ、六〇年代の「成長」型財政構造が、七〇年代に国際通貨危機、石油危機という外圧と、国内における高度成長政策の内的矛盾を招来し、赤字構造に転化したメカニズムを解明し、今日の国家財政の極端な赤字構造が、「高齢化」社会への対応のために国民の税負担増を強制する「税制改革」となって表面化していることを実証的に示した。とくに「売上税」という新しい形の重税への国民の批判がいかに強かったかを明らかにした。

両教授の報告について池元吉学部長が司会し、趙鳳彬教授が通訳をした。このシンポジウムも盛況であった。教授、大学院学生、学部学生、社会科学研究所員など、五〇人以上が参加した。池元吉学部長は、日本の大学との学術交流の必要性を求めている。もちろん賛成であり、今後どのように進めていくかが課題である。池元吉教授によると、吉林大学経済学部は関西大学経済学部と学術交流を進めているという。

趙鳳彬教授、池教授が大学を案内してくれた。図書館も体系的な整備をしていないがかなり充実していた。だ

が外国書は予算の制約からか充分に入っていないようである。開放政策によって、かなり実務部門への予算が集中し、社会科学研究部門への配分が限られているからだとおもった。散歩中、両教授と雑談したのであるが、大
学も転機で、これから東北アジアの経済協力をどのように実現していくかの研究に重点をおくことになるであ
ろうといていた。まさに実践・実務経済学である。

この日の夕、長白山賓館に戻り、身の回りの整理をしているうち、金泰相氏夫妻から自宅での招待をうけた。
金さんの自宅は、ホテルから車で三〇分程かかる静かな「中流層」の住宅街にあった。五階建の集合住宅で、質
素であり、「団地」の緑や周辺の環境の整備はこれからだという。ご夫妻から格別な御配慮にあづかった。中国
人の中流生活の実情、子どもの教育、大学生の教育、住環境など、話は限りなく続き、私たち大学人同志、こん
なに寛ろいだことは珍しい。中国人一般の生活が、いずれ豊かになり、もっと日本との交流が盛んになることを
わたくしは願った。ご夫妻はとても明るく、盛り沢山の料理をご馳走してくれた。中国料理の手法、伝来などを
聞いた。私たちが、横浜で、こうした機会を十分にもてなかったことを恥じた。だが嬉しかった。私たちの家庭
より金さんの家庭の方が心の余裕があるのではないかとおもったりもした。

この日は、午後一〇時にホテルに帰った。さまざまなカルチャーショックを受けたせいだろうか、床に著くや
熟睡した。

③工場見学と歴史博物館で考えたこと

五月四日、いつものように朝食はお粥と、三・四品のお総菜またはパン食であった。昨晚のご馳走が残ってい
るせいか、朝食は殆んど進まなかった。午後八時三〇分にホテルを出て、長春市の中国最大の生産台数を誇る客
車車輛工場を見学した。この工場には、約七、〇〇〇人の労働者が働いている。工場敷地三平方キロメートルで、

そのうち、建物が一・五平方キロメートルであり、緑に囲まれたクリーンな工場であり、労働者はのんびりと働いていた。客車は硬座車（日本の普通の客車）と軟座車（グリーン車）を作っていた。中国独自の技術とノウハウで作っているが、最近では日本の東急車輛と技術提携をしているという。一九五七年に設立されてから三〇年を経過している。この客車工場はこれまでに車輛一萬輛を生産している。昨年は、一〇〇〇輛であり、今年は一一一五輛を目標にしているという。修理は三〇〇台であり、製造工程における熱加工、鍛造、冷却加工をしているという。いま工場は増産体勢に燃えているようである。一九九〇年に年間一五〇〇輛を生産するという。前述の東急車輛との提携だけでなく、イギリスの車輛メーカーとの技術提携をし、合作生産を目指しているという。大連の鉄道の車輛も、この工場で作ったという。工場の副主任は、外国の秀れた技術をもっている車輛工場と提携して現代的客車を作り、市民のニーズに答えたいという。わたくしは、この工場の騒音について尋ねたが、莊さんは、「この問題に腐心している。いまかなり騒音を低下させている」という。

この工場は、日本の車輛工場と比較してさまざまな環境条件に工夫をこらしているようである。だがもっと騒音防止対策をして欲しいとおもった。この工場の労働時間は八時間で二交替制を採用している。工場内には、診療所、病院、託児所、その他の福祉施設が完備している。軟座車は、日本のグリーン車より余裕があるとおもった。軟座車は夜間、寝台車に変わる。私たちが長春駅から瀋陽駅に行くとき乗った客車は軟座車であり、一部屋四人乗りである。この限りでは余裕があるが、最近では昼間に乗る軟座車は、一部屋六人乗りになった。これも請負制度によるという。帰途の瀋陽駅から北京行の夜行列車は軟座車であり、かなり快適であった。だが洗面、トイレの設計をもっと工夫してほしかった。

この工場見学の始めから終りまで、案内してくれた弁公室の副主任の莊慶軍さんによると、「今後、中国の交

通体系のネットワーク作りの中で、この工場は重要な役割を果たします。国民や外国人のニーズにこたえ、秀れたものを沢山作っていきます」という。荘さんは技術者であり、立派な紳士で、説明が上手できわめて説得力があった。

この工場で学ばされたのは、労働者も経営者も、役割分担がきわめてよくできており、相互の立場を尊重して、高生産性をあげている点である。労働者が主人公という印象をもったのはわたくしだけではあるまい。わたくし自身、近い将来、すべて軟座車にして、中国人が快適な旅をできるようにしてはどうかと荘さんに話をしたら、「その通りです」といった。わたくしの質問は少し厳しかったかなあと思ったが、それは自分にかえってくる問いでもあった。ここで日本の交通体系のあり方を考えた。これでいいのかと。

わたくしは、生産工場を見ると、嬉しくなる。生産労働を基礎にした経済システムをどうつくるかをたえず考えているからである。生産、流通、販売、サービス、消費のネットワークを計画的に作ることが、国民経済の基本である。この工場見学は私に改めて長春の経済の基礎を教えてくれた。

この日も、中国経済の実像を、現地で見ることになった。長春に来てよかったとおもった。中国経済論を、多数の文献で知るよりも、「百聞一見に如かず」である。

外国にいと情報が不足する。ホテルの各階の受付の英字新聞「China Daily」を読むのが精一杯である。中国語を解しないわたくしは、この英字新聞は助かる。中国の立場から、国際状況と国内状況をよく解説しているからである。客車工場の帰りにこの新聞をよむ。

この日の午後、吉林省歴史博物館に行く。日本帝国主義者たちがカイライ政権にした皇帝溥儀の写真を見た。彼らがいかに中国人民と日本人民をごまかし、中国侵略をしたかを改めて知り、憤りを感じる。この博物館にあ

る日本帝国主義者による中国侵略に基づく多数の中国人への残虐行為の写真を見て、猛省にかられる。こんな蛮行を二度と繰り返してはならないと。歴史博物館はわたくしにとって日本近代史の教師であった。

ここで日本の中国東北部への侵略史を整理したい。清末の光緒年間（一八七五～一九〇八年）には帝制ロシアが満州里―グロデコヴォ間の東清鉄道を延ばし、ハルピン―旅順間を結ぶ南満州鉄道を作った。だが、当時の日本政府は、日露戦争の結果長春以南の全線を支配した。一九三一年九月一八日満州事変を起こし、張学良軍が山海関以西の関内に撤退、日本帝国主義者は、一九三二年三月「満州国」を成立させた。この歴史がこの博物館に写真を通じて示されている。なぜ、日本の帝国主義者は、こうした蛮行をしてまで、中国人を弾圧したのか。心が痛む。いまいかに平和と民主主義が大切であるかを、この博物館で日本の中国侵略の事実を見て、認識し反省させられた。

④日本の中国侵略を忘れてはならない

冷静に考えてみよう。満州事変の本質は、政治的には、日本国内における資本主義の矛盾、一方における強引な資本の蓄積と他方における貧困の蓄積の矛盾を外への侵略を通じて解決するものであった。私自身、小学生の頃、先生から「日本は国土が狭い、人口が多い。だから資源のある中国を支配するしかない」という暴論を聞いた憶いがある。それは日本による中国の資源独占論であった。馬鹿げた思想であった。

一九三一年九月一八日の夜一〇時すぎ、奉天北部の柳条湖で小さな爆音が起った。関東軍は、この爆音を理由に、長春、四平街、奉天など満鉄沿線の主要都市の中国軍に対して一方的に攻撃を開始した。関東軍は、満鉄沿線の中国軍を駆逐したのである。これが「満州事変」の始まりであった。歴史博物館は、わたくしに、過去を反省し、日中平和友好の重要性を教えて呉れた。ともあれ、歴史博物館の写真資料は生々しいものであった。日本

の各自自治体も、二度と侵略戦争をしないという意味で、「平和資料館」を作るべきであると思った。私たちは、子や孫に戦争は絶対してはならないことを示す意味で「平和資料館」を各自自治体がつけてほしいと願わざるをえない。

長春の歴史博物館は展示の工夫をして欲しいものの、私たちの教師であった。それは日本軍国主義の侵略の歴史を事実で示して呉れたからである。中国と日本の友好を考える場合、この原点を忘れてはならない。当時日本は、中国を侵略した以上自らの自由を持たなかった。それは、日本近代史の恥でもあった。このことを心におさめて中国との友好をしないかぎり、日本の発展はないであろうとおもった。

だが、中国の学者は、どなたも、過去のことをいわなかった。それは当時の日本の軍国主義者の責任問題であって、あなたがた研究者や市民と中国人民は仲間であったから責任はないといった。だか私は、当時の日本の軍国主義を強制的に支持させられたものとして、中国侵略の道義的責任を感じざるをえない。中国の方は、心に刻まれていても、この問題を絶対に口にしなかった。だから彼らに格別な配慮をしないわけにはいかない。

私たちは、この立派な行為に、秘かに心の中に「侵略」という汚名の原点を、絶えず持ちながら、具体的な日中平和友好の仕事を続けることによって、それを克服しなければならないと考えた。今度の訪中も、この意味で、意義深いものだとおもった。

長春の歴史博物館の見学は、歴史としての現実感を鮮明にしてくれた。歴史としての現代、未来に向っての日中のあり方を重厚に教えてくれた。ひとりの人間として、市民として、研究者として感じたことは、日中友好を具体的に示すこと以外にないとおもった。

x

x

帰国してから、日本帝国主義支配下の「長春」に住んでいた人に会った。彼は、「先生、どう変わりましたか。

よかったですか」ときいた。わたくしは素直に答えた。「とても、人間的に秀れたまちです。銃剣をもったひとは、ひとりもいません。文化に溢れたまちです。長春市は質素だけれども、人間の活力に満ちたまちです」と答えた。そのひとは、「是非行きたい」といった。わたくしは敢えて過去の歴史を言わなかった。だたこういった。「長春に行くときは、レトロとしてのまちでなく、現地のひとびとと連帯して、日中の平和友好をどう作るかの地図を持って行つて下さい」と。彼は「なるほど、よくわかります。私自身戦前苦労したひとりですから」といっていた。

ここで帰国してからの感想を書いたのは、わたくしの中国の方がたとの連帯感を確めたいからであった。

吉林省の社会科学院の教授は、過去のことを口にしない。いまの日中経済協力をいかに深めるかを、真剣に考えていた。中国の若者も、社会主義中国をどのように発展させるかを真剣に考えていると通訳の方が話してくれた。彼らの謙虚さに学ばされる。

さまざまなことを考えながら歴史博物館をあとにし、近くの自由市場を見学した。夜はささやかで申し訳なかったが答礼の宴をもった。副院長の呂欽文さんら社研の方五人とくつるいだ気分が夜の一時を送った。

⑤長春の自由市場とまちづくり

五月五日、午前中、市内の国营市場と自由市場を見る。いずれも、活力に満ちている。価格表は一部にあるだけで価格は交渉で決まるという。あとで同室の海道教授と、長春滞在期間の日中学术交流の問題点を出し合った。海道教授は、いつも、理路整然と計画経済と商品経済のあり方について整理する。わたくしも同感であった。だが長春市民の生活のあり方については、若干の評価が違った。わたくしは生産力を前提にし、分配のことを考える。海道教授は商品経済の発展は計画経済を前提に考えなければならぬという。

私たちは長春市の市民が、豊になり、もっと「まちづくり」を展開して欲しいと思った。水道、電気、交通などのインフラ（産業基盤整備）の充実をしてはどうかという点で一致した。

また先述した自由市場には、穀類、野菜、魚、肉、衣類、家具など豊富であった。だが話によると、最近物価が二〇％近く上がっているという。金さんに案内された「長春市百貨大樓」という大きなデパートは品物が豊富であり、お客さんで身動きもできない程であった。

とにかく、長春での生活は快適であったが同時に緊張感で一杯であった。寛ぐ時間は三度の食事のときと就寝前の討議のときぐらいであった。海道、梶村、池上の三教授は、元氣潑刺としていた。わたくしは追いついていくのに精一杯であった。だからいつも、食事のときでも、行事への出席でも遅れがちだった。日中友好の中の福祉的学術旅行であった。中国の諺にある「取長補短」（チェイツァンブードアン）精神で毎日を送った。いや、この言葉が中国学者との学術交流の哲学でもあった。「互いに長所を学び短所を補う」哲学であった。それはつきあいの「社会的自然」なのかもしれない。

午後一時に、吉林省社会科学研究所々員の方々と別れなければならなかった。

長春市での滞在期間は、わずか一週間であったが、研究報告、講演シンポジウム、調査・見学の行事を通じて、日中学術交流ができたとおもっている。

先にお名前もあげた研究所の先生以外にも、吉林省社会科学院日本研究所でお世話になった所長の弥継武さん、副所長の郭洪茂さん、朝鮮研究所の副所長の竇長伍さん^{ドウチャンウ}、日本問題研究会理事長の張声振さん、社会科学院副院長の「現代交際」編集主任の呂欽文さん、その他の所員の方々に格別な配慮を頂いたことをここに記しておく。

長春でもうひとつの想い出は、前にふれた自由市場と国営市場を見学したときのことである。国営市場にも食

糧品、衣類はふんだんにある。価格も安い。市民は人民券で品物を買っている。コメは一〇キロ三〇〇円であり、野菜も日本の一〇分の一の値段である。肉も、以前からみると高くなったというが、豚肉、一〇〇グラム三〇円である。女性のワンピースが二六〇円である。市民は、私たちが持っている兌換券ではなく、かなりよごれた人民券を使っている。壹分（三銭四厘）の人民券の大きさはタテ約四センチ、ヨコ九センチの可愛いお札である。壹角（三円四〇銭）の大きさはタテ約五センチ、ヨコ一〇センチである。

私たち外国人は兌換券を使っている。この兌換券は、一九八〇年四月一日に中国銀行が発行したものである。この兌換券は中国銀行が、外貨のブラックマーケットの取り締りを強化するために発行したもので、私たちは一元三四円に換えて、買物することになっている。この兌換券でホテルや外貨専門のデパートで、商品を自由に購入することができる。商品購入のさいに一定率の免税措置があるので、人民券よりも〇・五倍の価値を持っているようだ。長春市の街頭の露天市場で、ネーブルを五箇買ったとき二元五角だった。人民券を持っていなかったので、兌換券三元でおつりを貰ったら、人民券五角をくれた。このとき、露天商のおじさんは兌換券がほしく人民券と交換してくれといわれた。もちろん断った。この買物のとき海道教授にだいぶ助けて貰った。商人が兌換券を欲しかった意味があとでわかった。また自由市場には、実に沢山の商品が揃っていた。朝夕市場は客で溢れるという。最近、この自由市場での個人商店の経営者が「金持ち」になっているそうだ。大学教授の月給二〇〇元の三倍から五倍も収入があるという。訪中前に、都市近郊の農村で「万元戸」（一年間に一万元＝三四万円以上の収入ある農家）の話をきいたが、そのうち都市の商人の中から「万元商」が出てくるのではないかとおもった。

帰国してから長春市の東北一〇キロにある中日友好浄水場の記事（朝日新聞、一九八八年六月一八日）をよんだ。それによると、日本の二十億円の無償援助で中国初の「飲める水道」を目指して約一年の工事で竣工に漕ぎ着け

た。これには、技術指導を担当した日本側の責任者沢信利さんの助力によるところが大であるという。沢さんらの水道メーカーと日本の大手商社の共同プロジェクト一四社、延べ七〇人の技術者が「生水は飲めない」という中国の常識に挑戦した。厚生省基準では飲料水は、濁度二度以下とされている。だが水源地の濁度は二七度である。これまでの浄水も六度から七度だった。中日友好浄水場は、この六月初めに、〇・五度の「飲める水」が一日一八万トンできるようになったという。まさに快挙である。こうした方式で、長春近郊に、中日友好発電所が建設され、長春市の夜も明るく、家庭も明るい電灯を使ってほしいとおもった。日中友好発電所も続々作って欲しい。

とにかく、長春はきつとすばらしいまちになるであろう。長春滞在のある日、四人で、ホテルの前からトロリーバスに乗って、駅に行った。駅は満員である。ハルピンに行く人、瀋陽に行く人、北京に行く人、大連に行く人、ひと、ひと、ひとでごった返していた。私たち四人は、駅からスターリン大街（大通のこと）を通って、散策しつつホテルに帰ることにした。約四〇メートル道路のわきの五メートルの歩道を歩いていたら、頑丈なコンクリートの高い石塀に囲まれた古風な日本風のお城のような立派な建物に出合った。それは吉林省党委員会のビルである。私たち四人は入口で「芸術的にも秀れた建物であるから入って建物の写真をとりたい」という趣旨の内容を身振りで「守衛」に伝えた。だが駄目であった。だから、外からその小さな「天守閣」のような白壁づくりの建物の写真を撮った。この建物は、旧日本の関東軍司令部であったという。これはあとで知った。人民服を着た青年が出入りしていた。また人民広場に面した堂々とした中国人民銀行ビルは、かつての日本軍国主義下の中央銀行本社であるという。帰ってから、改めて長春のまちの歴史をみると、一般日本人のかかわりもいかに大きかったかを知る。日本の中国東北部（満州）支配は、関東軍や日本の官吏にとって「王道楽土」を目指したよ

うだ。当時、日本軍国主義は、「関東軍司令官」を主軸にして日本の軍人と官吏を優遇して、現地を支配することにあつた。当時（一九三八年）、中国農民は、自作・小作農で收穫の三五%の重税を課せられただけでなく、農家の商品購入価格の二〇―二六%の消費税を納めさせられたという。さらに、当時、「世界恐慌が波及して、主要な輸出品である大豆・大豆粕・大豆油の大暴落となり、さらに戦争と凶作（一九三四年）の影響も加わって、農民の生活の苦しみは深刻化した。これに乗じて三井物産・三菱商事等を始め日本商社は中国東北部の奥地に進出して穀物を安く買いたたき、他方農産物輸送を独占する満鉄の運賃が高く、（満鉄の運賃は、大豆の大連価格の三分の一を占めていた）その分だけ農民の手取り価格は引下げられた」（遠山茂樹他「昭和史」岩波書店。九八ページ。一部訂正）という。

この事実を伝えないかぎり、わたくしの気持は納得しない。わたくしは、関東軍の資料を知りたくて、吉林省の社会科学研究所に訪ねたが資料はあるが、それは未整理のため公開できないというのである。これが長春を去るに当って気になった点である。

もちろん、長春の市民が生き生きとしてまちづくりをしている姿に絶えず連帯を覚えた。だがこの土地で、旧日本軍人が蛮行を重ねた歴史を忘れることはできなかった。社会科学院長が、日本軍国主義と人民とは区別して考えたいと言つてもなかなか納得しなかった。院長はいつていた。「中国人民と日本人民も、日本軍国主義に反対して闘った同志ではないか。だから私たちは仲間です」といわれても、日本人として、責任を感じている。このことは前に書いたが改めて記しておく。

わたくしは、中国への学術研究の旅の基本方針は、あの西ドイツ大統領ワイゼッカーが敗戦四十周年記念演説でいった「過去に目を閉じるものは現在にも盲目である」という言葉を想起した。長春滞在期間も、このワイゼ

ツカーの言葉がたえず私を励ました。改めて整理して書く。

五月五日午後一時五十分発の瀋陽行の軟座車に乗る。中国で始めての体験である。一室四人乗りの日本のグリーン車に当るのだが最近では六人乗りになったという。「効率性」を試みているのかも知れない。話によると、列車も、請負制度で、サービス競争を通じて効率性を志向しているという。それにしても、トイレ、洗面のサービス施設をもっと充実しないのかとおもった。金さんは北京まで同道して送ってくれるという。その心に打たれる。長春から省境いの四平を経て瀋陽まで六時間かかった。列車から吉林省の草原、農地、牧草地など広大な平野である。中国の農村を見ると、労働集約に大きく依存しているかがわかる。列車の中で、地図と案内書をみる。ここでそれを手がかりに整理しておく。

⑥吉林省と吉林大学で考える

吉林省は面積一八万七、四〇〇平方キロメートル、日本三分の一強の面積である。人口は二、三五〇万人である。東京と神奈川と埼玉を合わせた人口にあたる。吉林省は、長春、吉林、四平、遼源の省直轄市と白城、通化の二延辺朝鮮族自治州、五県級市、三六県、二自治県からなっているという。漢族のほか、朝鮮族、満族、蒙古族、回族、シボ族など三一の民族が住んでいるという。

工業については前に書いたが、地下資源は実に豊富で、鉄、銅、石油、石炭、アルミなど七〇種以上が採掘されているという。とくに、金とニッケルの推定埋蔵量は全国で第三位だという。

農牧林業をみると、省の耕地面積は四〇五万ヘクタール、主要作物は大豆、コウリヤン、トウモロコシなど穀類のほか甜菜、タバコ、麻などである。甜菜が吉林省の特産であることはこちらで始めて知った。それに高麗人蔘、テン皮、鹿茸角の三種が、俗にいう「関東三宝」で名産地だという。高麗人蔘は全国産量の九〇%を占め、

鹿茸角の生産も中国第一位だという。ここでおもい出すのは、長春市内の「くすり」屋で買った一瓶六四円の栄養剤も、高麗人參のエキスから採ったものであった。この製造元は吉林大学薬学部であった。

列車から見る牧草地、農地は、都市生活者のわたくしをゆったりした気分にする。途中下車して一週間程滞在したくなった。しかしそれはひとりの知識人としての小さなわがままだった。

三 瀋陽のまち、遼寧大学の日本研究所のこと

とにかく、社会科学研究所で提起された「東北アジア経済協力」構想を、どのように具体的に進めるかを考えているうちに夜七時二十分、瀋陽駅に着いた。すでにホームに、中国国際旅行社瀋陽分社の郭麗姫さんが迎えにきてくれた。彼女は、瀋陽のあらましを紹介した。彼女ははきはきとした気骨ある女性で、なかなかの美人であった。彼女は夫が医学部大学院の学生で、一歳の子をもつ主婦でもあった。駅の一等室に案内され、直ちに旅行公社のおともで遼寧賓館に案内された。このホテルは、戦前、戦中、日本の商社や高級官僚が使用したホテルで、有名な旧「大和ホテル」である。四階建のモダンなホテルで、日本帝国主義支配時代の象徴的民間ホテルという印象である。客室も、食堂も、待合室も、中程度のホテルで、かなり気を配って作った洋式ホテルである。一般の中国人は入れないホテルであることを聞いて、がっかりする。ここでも「外国人優先」である。やはり気になった。戦前日本の軍人や商社マンが、おごりたかぶって使ったホテルだともうと、気になるばかりである。この夜は熟睡できなかった。下着を洗濯して、明日を待つというわびしい夜であった。

夜八時頃、わたくしたち四人はホテルから駅まで歩いて二五分程の市内を散策した。とにかく暗い。少し離れ

たら顔も見えない。どうして、夜八時というのに街灯も少なく、こんなに暗いのか。やはり電力の節約だとおもった。もちろん、中国では夜遊びする必要はない。だがせめて夜九時位までは、もっと明るいまちにしたらどうだろうかと思った。電力、水力の発電計画の需要と供給状況をどうするかを真剣に考えたらどうかとおもった。この点で、先方のニーズと日本の対応とを科学的に調査して、「明るいまちづくり」を進めてはどうかと、散策しながら考えた。あとでわかったことだが、いまその対策を具体的に考えているところだという。

ホテルから駅までの商店街は、テレビ、ワープロ、計算機から農機具、衣料品、サービス用品まで、かなり揃っていた。この都市に、ソニー、日立、東芝、三菱などの大手が進出していることはホテルの「使用」状況や「支店」の所在でわかっていった。日本のような一杯飲み屋はないが、生活必需品や食べ物を売っている個人商店街は活況を呈していた。個人商店街、飲食店街では、商人が煌煌と明るい電灯を灯して、買物の「客引」をやっているのに驚いた。いや当り前なのかも知れない。売上高競争で、また食品の質や食べ物の料理のサービス競争までいっていないが真剣に商売をしている。

「瀋陽」の夜のまちは、日本という露店街の活況を作ることに自由であるらしい。これも「請負制度」の政策ではないかとおもった。私たちは「商品経済」のすさまじさに理解を示すのに精一杯であった。この露店商店街から離れると、暗いまちである。駅まで歩いて帰るには余りにも暗いので駅前でタクシーを拾った。そのとき運転手は、ホテルまで四元であるというので四人は乗った。ところが、ホテルに着いたら、若い運転手はこれでは足りないと思った。わたくしたちと運転手との手ぶりの会話が始まった。とにかくホテルの受付で、決着しようとして、興奮している運転手を同行して貰った。「やみ」タクシーだった。私たちの言い分を、受付の服務員に話した。服務員が運転手に警告したせいかやっと四元であることを認めた。夜になると、こうした闇タクシーが

横行するのは、大連でも北京でも聞いた。それを責めるのではない。適正料金で、支払う習慣をつけて欲しいというのはわたくしたちの希いであった。「旧大和ホテル」での体験は、中国のサービス問題のあり方をどのように改善するかを考えさせられた。小さなことである。もちろん、わたしたち旅行者は、日本の物尺で考える習慣がある。この価値尺度をできるだけ捨てて、郷にいれば郷に従う現地の習慣の物尺で考えるようにした。こうした視点に立つことによって私たちの中国観を身に着けることができるのである。

五月六日、午前八時から一〇時まで、四人の共同シンポ。「中国の経済と市民生活」についての自由討議である。四人で「歴史としての現代中国」を理解するという点で一致した。「日本人は、支配者として何をしたのか」が常に秘められていた。カルチャーショックをどのように自分のものにするかであった。

午前一〇時、通訳の方が迎えにきてくれた。瀋陽の「故宮」、柳条湖鉄道爆破記念碑、瀋陽友誼飯店等を見ることになった。金さんと郭さんの明快な案内で見学する。中国の歴史は、天下取りの歴史であることを「故宮」の支配者の紹介の中で理解する。説明でも人間の歴史を、支配・被支配の歴史として理解した。「故宮」見学の中心で、民衆がどんなに貧しかったかを改めて考えてしまう。

五月六日、午後、金さんの気くばりもあって遼寧大学日本研究所の「シンポジウム」に参加することができた。とくに「日本研究」「日本の社会科学、人文科学の資料の蒐集」などについて話し合った。同大学日本研究所副所長の馬興国さんと同大学日本研究所の金明善教授が説明にあたってくれた。馬さんによると、この研究所は、解放後間もなく、周恩来総理が大学を訪問されて、「日中学術交流を深めるためにも日本研究所を作ってほしい」といったのがきっかけになって作られたという。現在スタッフが三〇人で、経済学、文学・歴史学、経営学、国際経済学などを中心に研究している。二人とも「日中経済交流の問題」について熱を込めて話していた。金明善

教授は、学術誌『日本研究』の編集者でもあり、一九八八年一月号の『日本研究』に巻頭論文「日本の産業政策と経済発展」を執筆している。日本産業の二重構造を詳しく分析している。同誌には、上海社会科学院世界经济研究所の王沛芳さんが「松下幸之助の経営思想」について書いている。その他「日本産業心理学の研究」「日本保険会社の直接投資」の論文などが掲載されている。「日本研究」を精力的に続けている。

金教授から『日本研究』に寄稿を頼まれたが、いずれ機会をみて協力すると答えた。馬さんも金さんも、日本との学術交流を切実に希望していた。馬さんが「是非神奈川大学と交流したい。というのは遼寧省は神奈川県と友好協定を結んでいる。したがって、神奈川県の大学と交流することはきわめて意義が大きい」という。賛成だが帰って検討してみたいと答えた。

私たち四人は、同研究所の図書を見せて貰った。社会科学、人文科学関係の図書が多かった。だがまだ系統的な分類をしていないようである。この点馬さんに訪ねたら、新しい五階建の日本研究所が大学内にできる予定なので、それまではいま暫定的に経済学、歴史学などを系統別に収めているだけだという。いずれ「系統的に分類します」といつていた。海道教授が「わたくしの著書、『世界経済の新構図』がある」といつて持ってきたときはびっくりした。作家の岡松和夫氏からの伝言を馬さんに託して二人と別れた。

ここで私事にわたって恐縮であるが、この瀋陽に改めて訪問することになる。このことを書いておく。

わたくしは訪中前に、神奈川県渉外部から貴大学の吉林省社会科学研究所以の学術交流、北京大での交流が終ったあと、神奈川県と遼寧省の交流五周年記念に、遼寧省政府の招聘の一環として県の学術代表として参加してほしいという要請をうけ、心よく引き受けた。この瀋陽に改めて、神奈川県代表団の一人として参加することを知っていたので、中国滞在中にこの瀋陽を二度訪ねることになったのである。

ところで、私たちは、六日午後八時の夜行列車に乗るため、ホテルを七時に出発し、七時一〇分瀋陽駅に到着し、一等待合室で一時間程休み、北京行の夜行列車に乗る。日本の寝台車より、広く余裕があった。わたくしは、ズボンの折れ目も気にならず、着のみ着のまま寝台車に横になった。こうなったら熟睡するだけである。どんな寝相になろうと、毎日が研究、調査、見学では、体がもたない。だれかに写真を撮られようと眠るだけである。だが眠むれない。まさにアンチノミーである。長春でお世話になった社研の先生や、私たちが最後に催うした小さなデナーパーティーで通訳の方が歌った「星影のワルツ」、副所長の「友好」の言葉が耳に伝わってくる。あのとき、わたくしは歌は苦手だから、中国の詩人、李商隠の佳篇「李花」の詩（長洲一二『人間讃歌』より）を紹介した。その「李歌」の一節が甦ってくる。それを紹介する。

「李花咲く細き道

独り来しこと いくたびぞ

枝にかかるは 小きき花

胸に重きは わが愁い

月なき夜の 闇にさえ

花の白きは 目にぞしむ」

先方へのお礼の宴会である以上、お客さんの歌に、競合して、詩の朗読をした。瀋陽から北京への夜行列車は色々なことを考えさせられる。「列車の音は、闇にきえ、ひとり自ら恥を知る」。とにかく眠ることである。隣の海道教授も、上段の梶村さんも、池上さんも、熟睡しているのに、なぜわたくしが眠れないのか。歌は私を興奮させる。だが退路はない。いつしか泥んこのようになって眠ったようである。

四 北京大学と北京のまちで考える

たしか列車の揺れもあって、熟睡五時間である。五月七日朝、八時近くに北京駅に着く。四人とも元気そのものである。旅行社の馬さん、本学大学院生であり、留学中の北京大の立石君、それになんと、同乗した金泰相さんが迎えのホームに来てくれた。金さんの気くばりに心温まるおもいであった。鉄道の北京駅は、始めてである。旅行会社の馬さんは、北京飯店で寛いではといったが、立石君は、北京大の図書館は土曜日なので十二時まで開館しているから、北京大に行った方がよいという。わたくしたちは立石君の意見に従った。この日、朝食もとらず北京大に向った。十一時三〇分に北京大に着く。立石君が頑張ったが、図書館は、もう閉館であった。時間を厳しく守っていないなあとおもった。

わたくしたち旅行者は素直に従った。十二時近くに北京大学の学生食堂で、食事をとる。立石君の配慮は見事なものである。この食堂での会話は、中国人と留学生の生活ぶりでもちきりであった。いま開放体制で、中国人は、活力を示しているが、それに取り残された人民をどう活力をつけてゆくにあった。朝食抜きの昼食での会話はあまり生産的でなかった。みなスタンスの違いがでた。

そうこうしているうちに、立石君が、北京大経済学部教授劉方棫氏が自宅にわたくしたちを招待したいというので、その時間にあわせた。日曜日なので、自宅で研究懇談会を開くはめになった。申し訳なくおもっているうちに、劉教授宅に直行した。教授宅で、北京大学の概況、日中経済協力の実状と課題について話合った。最後に、是非、北京大学で、講義をして欲しいと頼まれた。わたくしは、北京大学のカリキュラムの中に、都市経済学、環境経済学、地域経済学を導入してほしいといった。劉教授は、「教授のいう通り、いま経済学のカリキュ

ラムをどう作るか、二十一世紀に向けて考えている」と答えた。きわめて謙虚な回答であった。私たちの問題提起を入れ、検討したいといっていた。劉教授は実直で、重厚な考えをもった紳士である。

教授宅での話とは関係なく、あとで、一般的に聞いた話であるが、北京大学の教授の給料は、個人商店の経営者の収入の三分の一であるという。公務員や大学教授、インテリの給与が低く不満だらけであるとも聞いた。訪中前の日本のある新聞に、北京大学の有力教授である厲以寧氏が党中央に、提言した記事をよんだ。「公務員、大学教授の給与を引き上げるべきである」という内容のものだった。それは、北京大の教員たちの要望でもあった。つまり開放政策に賛成しても、個人経営者、国営企業の経営者などの所得の増加に対して、大学教授や公務労働者の所得が低いことに対する批判である。それだけでなく、開放政策が定着する中での開放区と内陸区の労働者の所得格差をどうするかが問われているようである。

北京大学での討論は、かなりリアリスティックな中味である。ここでも計画経済と市場経済の調整をどのように図り、社会主義下の人民の生活水準一般を向上させるかが問題になった。

北京大学で、四人は専門の分野の講義を依頼される。北京大学を去るに当って金さんや立石君に世話になった。北京大の食堂のメニューには、日本人向きの中国料理が何種類かあったので意を強くした。事実立石君は、私たちのために行き届いた食卓をかざってくれた。ひと息ついた感じであった。彼は大学院の論文試験の前なのに、研究室でも私たちの中国での印象をよく聞いてくれた。もちろん私たちとの感覚のずれもある。この討論の中味は省略したい。

五月八日、北京大学を離れ、旅行社の案内で万里の長城（ワンリーチャンション）を見学した。北京市から七三キロのところにある。途中、五月の青葉が目に沁みる。快晴に恵まれ、心機一転北京郊外の自然を飲む気分が旅

を続ける。アメリカの宇宙旅行者が、万里の長城は月からも見ることができると言っている世界一の建物である、といったことを想い出す。渤海湾の山海関さんかいかんから北京北西の八達嶺を経て甘肅省の嘉峪関かよくかんへいたる。六千キロメートルの長さであるという。今年三月に、「一年近くかけてこの長城の全行程を踏破したのは日本人の登山家である」と金さんから聞いた。驚くばかりである。万里の長城は、いまは北京郊外の観光地となっている。休憩所あり、土産品売り場あり、コンクリートの手洗い所もあり、入口に沢山の観光バスが並んでいる。茫々万里、茫々中国史、茫々人間史、茫々長城といった感じである、秦の始皇帝が三〇万の兵隊と農民数百万人を強制労働にかりたてて使った血と汗の結晶の産物といわれる。

観光地の長城の一番乗りは池上教授である。すすいと登る。私たちと金さん四人は、休んでは登り、登っては休んだ。わたしは愚作をものにした。「人は生き、人は働き、人は憩い、人は去り、ああくりかえす人の世。いまわれは長城の頂点に立つ」(五月八日のノートより)この万里の長城を見る限り、中国人の偉大さを改めて知る。よく登り、よく歩いた。金さんはこれまで数回登ったらしく、実に詳しい。旅行社の馬さんが「先生方無理するなよ」といったのが気になった。少し疲れた。旅行社のクルマに乗って、途中レストランで食事をし北京飯店に直行した。

五月八日、朝食を済ませて天安門広場に行く。中国人民解放の指導者毛沢東の肖像が鮮かに飾ってある。天安門を背にして右に人民大会堂、左に革命歴史博物館がある。天安門前の広場は東西五〇〇メートル、南北八八〇メートル、面積四四万平方メートルもある。四〇万人の人民の集会ができるというから、人民大広場である。市民集会場としては世界一の広さであろう。こんなところで「待ち合わせ」などできないであろう。それから天安門と広場の間を東西に貫く幅約一〇〇メートルのメインストリートが長安街である。自転車、自転車、人、人の群

である。人間のまちである。ここで自転車のことを考える。わたくしは、この自転車がいずれ「クルマ」にかわったら、北京市はチッソ酸化物公害のまちになるだろうとおもった。自転車王国のまち北京は賢明な交通政策を実行しているとおもった。わたくしは「クルマ」公害問題を研究している立場から見ると見事な政策だと思った。だがこれにはウラがある。公共交通手段であるバス、トロリーバス、地下鉄などの公共輸送機関が十分に発達していないのではないかと思う。地下鉄にしても全線二五キロというから横浜並みである。地下鉄を網の目のように作るか、トロリーバスをもっと増やすことが今後の課題であろう。国際都市北京は、地下鉄に重点をおき、公共性の効果をあげるべきであろう。もし、資金不足ならば、三〇年の契約で、世界銀行、OECD資金運用部、日本のODA、ECの援助で地下鉄や水道施設などの公共投資を最大限に展開すべきであろう。

政策科学者は、直ぐこんなことを考えてしまう。帰国してからの話だが、中国で二年間学習してきた、わたくしの若い友人によると、「北京駅から王府井通り^{ワンフウジン}を抜けて動物園へ向けて走っている一〇三のバス路線は『地獄の一〇三』とよんでいる」という。つまりギョウ詰め^{ギョウ}のバスなのである。それは旅行者が見るトロリーバスも混雑そのものである。それだけでなく自転車のことだが、一台一二〇元もする。大学助教授の一カ月分の給料である。それも、新車なのに修理屋で、ネジをしめたり、車体を点検して貰うという。日本の自転車は頑じょうにできているが、「北京の自転車はよくこわれる」という。いまは過渡期だから、いずれよくなるとおもう。これで安心した。とにかく公共交通機関が充実すればするほど自転車は少なくなるであろう。マイカーは、止めてほしいと思っている。北京市内を走っている「クルマ」は、公共機関のもの、公社のもの、会社所有のもので、個人の所有は厳格に制限しているという。市内には、ベンツ、フォルクスワーゲン、BMW、トヨタ、日産、本田など外車が多く、国産の「上海」「紅旗」は、少ないようである。私たちの乗っている旅行社の車はトヨタ製

だったり日産製のものである。外交官の「クルマ」はベンツが多い。

ところで、天安門広場での北京市の公共交通のあり方を考えているうちに「故宫」を見学した。中国三千年の歴史の重みのひとつを感じる。皇帝による人民支配のシンボルの歴史であるとおもった。

「故宫博物院」、まず入口の午門がある。高さ三七メートル。楼上に五つの客席がある。一四二〇年（明の永楽一八年）に建造し、一六四七年（清の順治四年）に改造したという。中央の出入口は、当時の支配者皇帝の専用で、その部下である大臣は左、皇族は右のそれぞれの門を利用して、人民支配のマナーにしたという。つぎに午門の北に大和門がある。大理石を敷きつめた堂々とした門である。次に中和殿、保和殿と続く。人、人の中で、通訳の説明をきく。印象に残ったのは、三つの建物をみて、当時の宮廷内には絶対君主の皇帝をシンボルとした「竜」の飾りで一杯である。人民の搾取と収奪の結晶体としての「飾り」を思うと、中国の歴史は、支配者の権力奪取の交替の歴史であるとおもった。毛沢東が、歴代の人民支配の「王制」を打倒し、人民主体の政治革命を実行した意義は大きいし、中国人民だけでなく、世界の人民にとって、大きな意義をもっている。ここで、改めて中国人民解放と統治の代表としての毛沢東の偉大さを知らされる。人民解放のシンボルとしての毛沢東の偉大性、それは個人崇拜としてではなく、一一億の人民解放の共有した指導者として位置づけるべきではないであろうか。もちろん「文革」という不幸な時期はあったにしろ、「故宫博物院」をつぶさに見ながら、こう考えた。中国人は、歴史的支配に対する人民解放から人民自己統治、人民の相互統治、人民参加の北京のまちづくりを、静かに考えてきたのではないか、と推測した。同時に、故宫を観光の拠点として見れないわたくしの風景センスの乏しさを恥じた。北京飯店に帰って、わたくしのノートをみるに、北京についてこんな下手な句が書かれていた。「燕樹蔭う、北京の深夜、音ひびく。」「自転車の群たえざる北京の朝」「人民の汗光り、北京燃ゆ」「五月晴れ、北京

の朝 人いそぐ。……まさに、茫々北京のまちである。

「故宮」は、私をしぼり、私をはなした。改めて「博物」とは何かを考えた。歴史をどう見るかを、考えさせられた時間であった。馬さんが、「先生は厳しすぎる」という。私たちは金さんの意義ある解説を聞きながら、「博物の歴史」とは何かを考え、静かに数時間を過した。ここでも靴の底がすれきれるほど歩いた。

午後、市内の国営市場と自由市場を見学した。もう中国での研究旅行も一日だけである。各人自由行動で、ワフウチンにしる、どこにしる、買物を含めて散策することにした。

ワフウチンの専門店は、かなり外国人客用にせんれんされていた。衣料品、文芸店、日用品、美術品、なんでもある。北京一の百貨店もある。だがどうして、気軽に入れるコーヒーショップがないのか。北京の銀座通りという人もいたが、「ウエノ」の一角という感じである。とにかく八時まで営業しているのに、この時間までもワフウチンは暗い。「ウエノ」以下である。ここでも人の群である。ときどき、兌換券をかえてくれという烏打帽をかぶった若い青年がくる。まさに人民多種多彩の顔がある。やはりとまどう日であった。手持ち少なくなった兌換券で買物をしようとおもった。私たちの買物も質素そのものであった。梶村教授は書物を、海道教授と私は、中国茶とハンカチと書物を、池上教授は、文具と書物を、これでは、中国外貨獲得に貢献しないかもしれない。旅行社の方は、学者は、「知恵を与えにきたのだから、買物をしなくてもいいのですよ」といつていた。たしかに、農協の方や経営者の団体旅行と違って、買物に興味を示さなかった。それでも、自由市場では三時間も費やしたのである。

北京飯店で、わたくし以外は帰国準備に集中した。わたくしは、手助けもできなかったが、これが、中国学術旅行の最後の夜であるとおもうと名残り惜しい。四人とも日中友好の中味を、自分たちの立場でどれだけ整理で

きるかを話し合った。

五月九日、慌しく、三人は出発準備をし、旅行社の車で北京空港へ向う。金さん、立石君も同乗。みんな元気そのものである。午後五時のJALの便で三人が帰国する。それぞれ、中国での学術旅行を点検する。やはり、なんととはなしに、緊張感がよみがえる。金さん、立石君とわたくしは、ここで別れる。

北京、長春、瀋陽、北京という日中学術交流の旅は、未来に向けた日中合作への旅でもあった。「和やかな中にも厳しさが、厳しさの中にも和やかさが」とあるという旅であった。金さんの格別な配慮に改めて、四人でお礼をいいたい。金泰相さん、今後とも、中日友好のために、対等、平等、互惠、互栄の立場で頑張りましょう。本当に有難うという気持ちで一杯である。

五 神奈川県を訪中団に参加して

——瀋陽・大連で、県・省の友好関係を見る——

①改めて北京で物価問題を考える

私たちの日中学術交流の旅は終わった。しかしわたくしにとって、遼寧省と神奈川県の交流五周年記念事業に参加する仕事があった。まだ日中友好の旅は続く。長洲知事を代表とする県の代表団は、五月十二日から一八日（ただし知事は一六日の五日間）まで次の目的で訪問することになった。「県と遼寧省との友好締結五周年を記念して、遼寧省内で行われる各種記念行事に参加するとともに、省内等の都市や各種関係機関の表敬訪問や視察を行い友好親善を深めるため、遼寧省人民政府の招きに応じて訪問するものである」と。副団長は作家の安西篤子さん、青少年代表は吉村恭二さん、県の日中経済交流団長の小山八郎さん、渉外部長の宇野喜三郎さんにわたくし

の六人で、その他に記者（東京新聞、読売、産経、朝日、毎日の各新聞）、随員四名、それに通訳一名で合計十六名の代表团である。わたくしは県学術代表团として招待され、参加した。

代表团と合流するためにわたくしは北京に二日間滞在することになった。

五月一〇、一一の両日、北京飯店で“China Daily”“Beijing”「北京周報」「人民日報」などを読みながら、同時に、社会科学研究所、吉林大学、遼寧大学、北京大学、自由市場、国営市場などでの交流ノートをまとめることにした。

やはり経済学者として、人民の生活、物価問題に関心をもった。北京飯店のロビーで、コーヒーを注文したら四元（日本円一三六円）である。あとで現場の労働者の一日の賃金をきくと、三元であるから外国人が外国専門店でのむコーヒー代以下であるという。現場の労働者の一カ月の賃金約九〇元（約三〇〇〇円）、国営住宅の家賃が一七元（約五八〇円）この家賃には光熱費なども含まれているという。コメは一〇キログラム一〇元（三四〇円）、おそらく月一人当り二五キログラム消費するとして、八五〇円である。三人家族で、六〇キログラムを消費すると、二、〇四〇円であるから、生活は楽でない。交通費、衣食費などの支出を計算に入れると、一五〇元はかかるであろう。共稼ぎして、やっと、少し余裕ができる。ぜいたくはできないのである。都市では、女性の服飾もカラフルになっている。『中国百科』（小島晋治、太田勝洪編、大修館書店、一九八六年）の「日常のくらし」の項によると、一九八四年の都市労働者の一人当り収入は年六〇八元で、前年比二一・五%の増となり、「経済の好転に伴う食生活の変化とスポーツ運動不足から、大・中都市で肥満した人が目につくようになり、成人全体では標準体重を五%以上超えたものが三五・九%も占めたという。このため、やせるための薬、茶がよく売れ、美容体操がはやり、LサイズやLLサイズの衣類が盛んに作られるようになった」（『北京周報』八五年九号）という。この

北京でも、朝六時半頃からあちらこちらの広場で、太極拳をしている。朝六時に長春の長白山賓館から南湖公園を見ると、太極拳を盛んにやっていた。

農家の一人当り収入は三五五元ということだからまだまだである。一人当り収入五〇〇元以上の農家が全体に占める割合は一二％であり、逆に一五〇元に達しない農家は七・六％である。一九八四年に比べて、毎年一二・五％の収入増があったと仮定すると、八八年は、都市労働者の年収入は八三〇元近くなる。だが月九〇元で計算すると年収入一、〇八〇元だからこの三年間にかなり増加したといつてよいであろう。恐らくボーナスが四カ月あると計算すると、年収一、四四〇元になる。

とにかく人口、正確にいうと（統計局発表）一〇億八、〇〇〇万人が衣食住を満すということは大変なことである。これまでの経済学における国民経済では考えられないことである。従来、近経学者も、マル経学者も、規模の経済を前提に経済学を考えてきた。

さまざまな資料によっても、統計上、生活水準が向上し、生活を近代化、多様化させていることも間違いない。前述の資料によると、中国では、「四種の神器」（「老四大件」）が自転車、ミシン、ラジオ、腕時計だそうで、八三年の自転車生産台数は、二、七〇万台で世界一、ミシンは一、〇八七万台で、世界の半分を生産している。耐久消費財保有台数は、一〇〇世帯につき自転車一六〇台、ミシン七六台、腕時計二六八、洗濯機二九台、扇風機六四台、ラジオ一〇五台、テレビ八三台、カメラ七・三台であるという。

北京飯店でテレビをみると、電気冷蔵庫、ガス湯沸器具の宣伝をやっていた。百貨店にいくと、電卓、テープレコーダー、バイク、ワープロの陳列品に人が集っていた。「洗濯機、冷蔵庫、バイク、カラーテレビ」の新「老四大件」（新四種の神器）を目指している。これは個人商店経営者や中級商人、ホテル経営者、観光関係の会

社経営者など高所得者の家庭では当り前になっているのかもしれない。だが公務員の生活は楽ではないらしい。北京大の教授が、八百屋の前で、安いものを買うために行列している姿もあるという。低・中所得者にとって、以前より生活水準が向上しても、やはり質素で、地味な生活を送っている。未だ貧しい生活を送っているといった方がよいかも知れない。

物価問題については、長春でも、北京でも市民は不満をもっている。このところ物価上昇が激しいという。たしか八八年第七期人民代表（全人代）第一回会議でも物価問題が大きくとり上げられた。「茶葉蛋（しょうゆ味で煮た卵）を売るおばあさんは月に三〇〇元から五〇〇元稼ぐのに先端技術にかかわる教授の給料は二〇〇元余り」と上海の民主党派代表董幼嫻氏が現状を批判した。政府も物価高騰によって一部の生活水準が下がったことを認めた。ここへきてわかったことは、工場労働者など生産現場で働くものには、物価上昇分の手当がでるから何とかなるというのである。個人経営者も高所得者であるから、物価上昇分を吸収できる。だが公務員は、可処分所得が物価上昇分だけ低下する。

わたくしが、北京で入手した「北京周報」（八八年五月三日号）によると、「国家统计局は物価の大幅上昇による市場の変動が当面の経済生活中の際立った問題になっている」と指摘した。つまり八八年第一・四半期に、全国の市場小売価格水準は平均一一%前後、上昇した。全国の三十二の大・中都市での統計によると、これらの都市の物価指数は平均一三・四%に上昇し、そのうちの副食品価格は二四・二%、とくに新鮮な野菜などの価格は四八・七%上昇したという。

新鮮な野菜の価格が大幅に上昇したのは、「供給が需要に追いつかないためである」という。これはあたりまえの指摘である。この数年、「非農業人口が急増し、野菜の作付け面積は年ごとに減っているうちに揚子江中・

下流の冷害が重なって野菜の供給源が減少し、需要と供給の矛盾は激しくなった」という。

だが、なぜ物価上昇をもたらしたのかを厳しく追及していない。わたくしは、開放体制の積極経済政策が構造的な理由にあるとおもう。巨大なホテル、工場への過剰投資に基づく通貨発行量の膨張が物価上昇をもたらしたのであると思う。この点のきめ細い分析を政府はすべきである。ここでも計画経済が指導権を発揮して市場経済を市民生活中心のサイドに軌道修正すべきなのである。市民生活の安定を目指した開発政策を展開すべきなのである。

物価問題については、帰国してから、『北京周報』や日本の新聞などの記事をよんだ。一面、的を突いているとおもった。物価問題は、モノとカネとヒトの需給関係の問題だけでなく、経済構造システムの問題ではないかとおもった。もちろんわたくしは開放政策を支持する。問題はその政策の運用の仕方なのである。

政府の発表でも、物価の問題は深刻である。だがどうして、市民のニーズに基づいた物価対策を取らないのかとおもう。

『北京周報』によれば、中国経済は、国民所得が、八四、八五年にそれぞれ前年比一二％台の伸びを示した。日本の高度成長並みである。八六年、財政・金融の引き締め政策を実行したが、一二％の伸びを示した。この間全国平均物価も、年率八％台の上昇を記録した。

本年五月頃から、北京など都市部では、豚肉、野菜などが値上がりした。昨年に比べ、前述したように二ケタ台の物価上昇である。市民や公務員が物価高騰に不満を持つのは当然前であろう。

たしか積極成長論の趙紫陽書記は、「当面の中国经济体制改革の重点は物価と賃金の問題である」といった。いまの物価抑制のために建設投資をおさえていくといっている。賛成である。話によると、国務院は、五月二七日、

北京市内で建設計画のあるホテル、事務所ビルなど一部の建設計画を中止したり、着工を延期したりして、その費用を物価対策や福祉、教育費にまわすという。五月に入って、都市部で、豚肉、野菜などの主要食料品の統制がはずされてから、前述したように二ヶ台の物価上昇があった。政府は、そのため、一人当たり月一〇元以内の手当支給で対応したというが、生活水準の向上による消費ブームをどのように鎮静するかが今後の課題になるであらう。

帰国してから、中国経済の専門家にきいたところ、『人民日報』（五月十九日から六月三日）は、こういっているという。評論員の論文「沿海地区経済発展戦略を論ず」を掲載し、内陸部第一部勢力による生産力主義者に対する批判を認めつつ、改めて、中国経済の生産力の発展を沿海地区の開発に求めることの重要性を説き、従来の非効率、非能率の低次の生産方式から脱脚することにある。そのために過渡期の矛盾を克服することだというのである。中国共産党中央は、成長路線を採用しながら「安定」路線を吸収し、その矛盾を解決しようとしているのではないかとおもった。

×

×

五月一〇日は、午前十一時三〇分頃まで、北京飯店の一室で、メモを取っていた。第一は、先方から個別的な教授の要望である「吉林大学、遼寧大学、北京大学の各経済学部との交流をどうするか」、「東北アジア経済協力の研究交流をどうするか」などについて整理した。だがこうした問題は、県・省レベルの交流計画の中で考えない限り前進しないとおもった。一方個別的に、それぞれの大学の経済学の重点のおき方によって、研究者の交流のあり方を考える必要があるとおもった。この点は、帰国してから学部や研究所で、問題を提出したいとおもった。それに、わたくしが関心をもっているのは、開放政策との関連で出された外国資本の導入方式のあり方と、社

会主義的株式会社方式とは何かであった。この点はいずれ研究ノートとしてまとめたい。

この日、午前十一時三〇分に国際旅行社の単利さんが「先生、食事に行きましょう」と迎えに来てくれた。彼女は北京外語学院をでて三年目である。「日本語は案内する程度で、専門のことはよくわかりません」という。謙虚な方であった。多分、上司の馬さんからいわれたのだとおもった。わたくしがつい専門のことを聞くので、こうした自己紹介をしたのだとおもった。とにかく単さんと運転手は、私を天壇公園の旅行者向けレストランに連れていってくれに。同じテーブルで、相変らずの中国料理攻めに会う。貧乏症だから「ぜいたく」だと思った。若い二人はよく食べ話す。よかったとおもった。

②「一人っ子」政策について

このとき、中国の「一人っ子政策」について尋ねた。運転手はこういった。「わたくしは、三歳の子と妻と暮らしているが、もうひとりほしい。だが政府の政策は正しいとおもう。一一億の人が、生活水準を向上させる政策だから、いいとおもう。だから一人っ子に満足している」。単さんは「もし結婚したら三人の子がほしい。だがそれは将来の中国のためによくない。貧乏のくらしを繰り返したくないから。政府の政策は正しい」という。なるほどなあとおもった。エリートの答えである。

多分、一九八七年末の人口統計によると、前にふれたように一〇億八、〇〇〇万人である、一人っ子政策が採用されたのは七〇年代末であった。人口の自然増加率を％に抑制するためであった。たしかに政策担当者にとってそれは、将来の中国経済の発展のためにベストな政策選択であったと思う。開放政策が定着し、生産性が増大しても、人口増に吸収されては因るという危機感がある。それまでの二〇年間、生産性が向上し、食糧生産も急速に伸びているにもかかわらず、人口増に食われ、一人当りの所得も依然として低い。七九年一月から一人っ

子政策が生まれたのは当然であろう。八〇年、広東省計画出産条例を皮切りに、各省で条例となり、一人っ子に優遇措置が取られたという。従って、二子以上の出産には、罰則や強制措置がとられるという。例えば、二子をもうけると一〇〇〇元の罰金だけでなく、さまざまな優遇措置を受けられなくなるという。

一部の農家では、労働力なしに増産できないというので、二人以上を設けるらしい。「罰則も金で解決できるから」という。长春市でも、北京市でも、あちらこちらに「晩婚を進めるスローガン」を見た。政府当局の立場から当然の措置であろう。だが、教育的には問題があるようだ。「一人っ子」政策は、「わがままな子どもを作り、社会的関心をなくしてしまう」という意見もある。たしかに公園などを散歩すると、若い夫妻が、真中の一人っ子の手をつなぎ、両側または後ろ側に老夫妻が歩いている姿を見た。だが、一人っ子のしつけ方、教育の仕方によっては、中国社会を担うための自立と連帯の精神を養うことができるであろうとおもった。こんなことを評論風にいってられない。日本の戦後の核家族政策を、中国は、受け入れているのだという。

とにかくこうした一人っ子政策は、一九八三年に、人口の自然増加率一・一五%、八四年一・〇八%と一%以下の目標に近づきつつある。だがOECDの推計によると、それでも二〇〇一年に中国は一五億の人口になるといわれる。従来の経済学で、五億以上を対象にした国民経済はなかった。依然として、中国経済は、分権化しない限り、進歩がないのではないかとおもった。もちろん、いま分権化が進んでいる。

三人がレストランで、こんな会話していると、通訳の方が、わたくしは朝日の『天声人語』をよんでいるという。人口政策も、労働者、農民が知識人化することによって、かなり解決していくのではないか。社会主義とは、ある面で社会の富を共有するためにすべての労働者が知識人化することではないかとおもった。一九八三年で文盲率が二三・五%だという。たしかに農村では、子どもが繁忙期には学校を休み、農業の手助けをするとい

う。

とにかく、都市と農村の格差をどのように縮小するかも中国の今後の課題であろう。

午後三時、旅行者専門の「北京友誼飯店」を見学。品物は豊富である。私は、仙頭のハンカチと中国茶を買って休む。通訳の単さんが「質素ですね」という。「そう。私自身欲しいものがない。メイヨーである。」単さんは「学者は本にしか興味がありませんか」ときかれ、そんなことはないと答えた。「先立つものがないのですよ」といったが、理解できないようだった。

この店を出て、午後四時をまわった頃、運転手に頼んで、「魯迅が最も充実した時期」(一九三二―三四年)に書いた『狂人日記』、『阿Q正伝』の旧居を訪ねた。残念である。工事中といわれて、ホテルに戻った。

五月十一日も、食事のときと、自由市場、日本の新聞社の支局、頤和園の見学を除いて、ホテルで、資料の整理をした。

五月十二日、午前「北京週報」「チャイナ・デリー」「ペイジイン」などを切り抜いて、整理する。午後、北京空港へ行く。神奈川県代表団と合流するため一時間前に到着。中国のさまざまな団体が、外国からの招待客を待っている。成田空港よりのどかな風景である。ここでもしるい掲示板をみた。「養毛剤一〇一をおもちの方は、予め届けて下さい」という税関の掲示である。わたくしは、北京で聞いた一〇一の養毛剤は、もと一箇二〇〇円だった。その後日本の観光客が二倍、一〇倍、四〇倍に釣り上げ、もう手に入らないという情報を聞いた。全く馬鹿げた話である。「一〇一」をさがす苦勞で、どれだけ脱毛するかを、あるところで話したらみんなが賛成した。日本観光客の、価格つり上げをいやはど体験させられた。これは、帰国してから聞いた話であるが、ある大学の医学部の検証によると、養毛剤活用でうまくいっている方が三六%であるが後遺症で苦しんでいる方

が七〇%であるという。もちろん脱毛症の方の気持はよくわかる。もっと副作用のない養毛剤を開発できないものなのか。関係専門家をお願いしたい。

③ 神奈川県と遼寧省との友好五周年事業に参加する

知事を団長とする県代表団は、到着時刻より四十分おくれて午後二時五十分に着した。だが待合室で、待っている間、代表団、随員、記者の方はこない。四十分程待っていたら、随員の方がきた。皆さんはどうしたかときく。いや、知事をはじめとする代表団は、一等待合室の方に行ったから、「先生も合流してほしい」といわれて、一等待合室に案内された。この時、馬さんと別れた。「先生ご苦労様です。日中友好のために頑張ってください」と励まされた。私たち代表団一行は、遼寧省の外事弁公室副主任隋旭東さん、通訳の方々に迎えられた。瀋陽の中国民航機の出発時間が夜の十時なので、それまでの間北京市内を見学しながら、天壇公園に行った。わたくしは二度目の見学である。この公園は開設一四二〇年というから、天帝を祀った中国最大の史跡公園である。天壇は面積二七三万平方メートルで、祈年殿、皇穹宇、環丘壇からなり、明、清の皇帝が正月の上辛日と冬至節に、五穀豊饒を天に祈ったところだという。青色の「るり（瑠璃）瓦」を乗せた三層の屋根でできた祈年殿は、天壇のシンボルであり、木造建築物で、高さ三八メートル・直径三二・七メートルもあり、釘を使わず、二八本の柱で支えられ、彫刻もきめ細い。芸術作品である。二度目の見学だから、改めてこの木造建設に暫し心を捕われる。

ここで二時間程過してから市内の中国レストランで夕食を取る。記者たちの北京初印象の話が面白かった。

「自転車」「人の群れ」「交通渋滞」「人民服と市民服」「新高層ビルと旧低層家屋の共存」「広い道路と路地裏」「中国料理と日本中華料理」……など話は尽きない。

午後一〇時、北京空港発瀋陽行CA六一〇八便に乗る。満席である、四十分で瀋陽空港に到着。省庁人民政府の方方、日本領事館の方方が、三十人程迎えにきてくれる。直ちに数台のクルマに分乗して友誼飯店に案内される。夜十一時三〇分過ぎである。

明日の友好五周年のイベントの準備で、渉外部の若い職員と秘書は、夜中の二時過ぎまで打合せをした。良く働く。

十三日、朝六時三十分起床、知事を始め全員元氣潑刺、低血圧のわたくしは、朝早いのが^{こた}える。だが若い記者たちの顔を見るとつい元氣が出る。七時三十分、朝食を済ませ、身仕度を整え、八時三十分、出迎えの省庁のクルマで、省長を表敬訪問する。省人民政府の幹部五〇人、本県側から県友好代表团（知事以下十六人）、県議会友好代表团（中尾団長ら十二人）県経済交流促進代表团（二七人）、県日中友好協会代表团（四十三人）らが出席した。

李長春省長は「両省県の友好交流の成果は着実に実を結び、他の省県のものより優れた関係にある。今後、経済、技術交流を発展させたい」と述べ、長洲一二知事は、省招待の御礼を述べたあと「今までの交流を一層発展させるため、今後は交流から合作へ、親善から協力へと前進させたい」と格長高い挨拶をした。両氏に限りない拍手が湧いた。会場は実に終始和やかで、お互いに日中友好一帯化という雰囲気であった。一〇時五十分、省人民代表議会（主任王光中氏）を表敬訪問、王さんの人間味ある歓迎をうけ、自由に懇談をした。

十二時に友誼飯店に戻り、昼食を済ませたあと、知事と省長との会見が行われた。記者団が同席し、私たちはホテル（友誼飯店）で雑誌を見たり、経済開発の状況などを聞いたりして過した。

知事と省長との会談の内容を、各記者が直ちに神奈川県支局に送った。両省・県の友好関係を発展させる

ために①遼東半島の八市十六県・区に設けられた外向型経済開発区のための経済協力、②両省・県の相互駐在員派遣によるさまざまな協力関係を行うことが基本合意である。あとで帰国して県省友好提携五周年記念事業の新聞関係の記事をまとめると、一〇項目であった。①長期派遣技術指導者の枠を拡大する。②技術研修生の受入れを拡大する。③職員訓練指導システムの協力、④遼東半島の経済開放に伴う協力と支援体制づくり、⑤職員の相互駐在、⑥省・県の友好関係の実績のPR、⑦相互の経済関係についての情報提供、⑧青少年の教育の量・質の発展、⑨遼寧楽団と神奈川フィルとの交流、⑩友好商店・工場・学校などの人の交流などである。

いまひとつの問題点を検討する余裕がない。だが、これまでの五年間の友好交流の成果に立って、今後五年間の友好交流の方向を具体的に示したものとして、知事の民際外交は、全国的に評価されるであろう。

残念なことに、ここには、学术交流の問題が入っていない。あとでこの問題を提案することにした。

この日、両省県にとってなによりもまず史的イベントは、これまでの友好の実績を示す事業としての「友情の時計台」の除幕式であった。午後三時に、瀋陽市の南湖公園で開かれた。冬が長いせいかライラックの白い花が一面に咲き溢れる公園の縁は、眠にしてみる。イベントはこの公園の入り口広場に、県が寄贈した高さ八・一メートルのからくり時計を公示するセレモニーであった。一時間を刻むごとに、人形がでてきて、「キンコンカン」という音を奏でる時計のからくりである。この除幕式に、前述の代表団、ボランティアの代表団など合計すると日本人九〇余名であり、先方の現地小学生、市民、公務員など三〇〇名のひとが参加した。「熱烈歓迎」(ルウ・レ・ルウ・ホワン・ユン)の大合唱であった。この大合唱にライラックの白い花が、より光って見えた。このときの知事の挨拶は印象的であった。「神奈川県と遼寧省との友好提携五周年が経過しました。両省県の人々の心は、固く結ばれました。時計台の二人は、日本の縁結びにちなんで、知事は日本人の人形を「阿結」(アーヂィ

「こゆうちゃん、省長は中国人形を「阿縁」(アーユエン) えんちゃんと呼びました。この二人の少女が協力して平和と友情の鐘の音を鳴らし続けるでしょう。日中友好のシンボルです」と。わたくしもこの二人の少女が協力して平和と友好の鐘を永久に鳴らして欲しいと願わずにはいられなかった。

省長と知事の歴史的除幕式が終った瞬間、年少少女が時計台にかけより、びっくりした顔をして、人形を見上げていた。私の目に、涙がかすかに込み上がる。

それは、過去の日本の侵略の歴史への反省と、いま両国の平和の創造をこの地域から発展させている息吹を見たからである。

ここで少し、過去のことに触れざるをえない。というのは、あの時計台の二人の友好の結びの蔭には、余りにも中国人の犠牲者が多かったからである。日本軍国主義者が銃剣で、この瀋陽を支配した時代から、いま日中平和友好、対等、平等の立場で、市民同志の友好と平和創造の時代へと発展したのである。時計台はいま友好のシンボルになった。

このことを噛み締めた。当日、外国人客の専用ホテルで再び日本の中国侵略の歴史を考えた。

一九三二年、日本政府は、「満州国」を成立させた。日本帝国主義の植民地支配の象徴として位置づけた。遼寧省は、安東、奉天、錦州の三省に細分化された。だが中国人民は、日本の軍国主義支配に反抗した。抗日解放人民軍が組織され、その指揮者が人民の英雄楊靖宇氏であった。彼の伝記については、沢地久枝さんが『もうひとつの満州』(文芸春秋社、一九八二年)で克明に書いている。出発前に読み、歴史の重みを感じた。日本支配に対する中国人の抵抗は、日本の敗戦による「満州国」崩壊まで続いた。当然なことであるが、それは中国共産党のねばり強い民族解放と独立運動の成果であった。

日本敗戦と同時に、ソ連軍が同省の解放に協力し、「満州国」皇帝愛新覚羅溥儀^{あいしんかくろうふぎ}は逃亡の寸前のところをソ連軍に捕えられた話は有名である。このことは、映画「ラスト・エンペラー」でも有名である。一九四八年、中国共産党の指導で省全体が、解放された。この歴史は忘れてはならない。

あの日中友好の時計台のユー（結）ちゃんとエン（縁）ちゃんの告げる鐘の音には、この歴史の響きがある。日中平和友好の鐘の音が大地に根づくことをひそかに願った。いや根づいているのだ。

一三日の夕、市内の外国客の専用ホテルで、省主催の私たちを歓迎するレセプションが開かれた。李省長が「日中平和条約をどんなことがあってもさらに発展させましょう」そして「私たちは神奈川の皆さんを喜んで歓迎したい」と。この発言には、日本で問題になっていた奥野前国土庁長官の「日中戦争偶発発言」への反省を促したことも意味しているとある記者はいった。その通りである。政権政党の大臣が、日中平和友好条約に反する発言は、まさに中国人に対する侮辱である。わたしも恥をかいた。馬鹿げた発言である。

知事は、「日中友好提携の精神は、近い過去において中国人民に大きな惨禍を与えた深い歴史への反省であり、日中友好こそアジアの平和安定に不可欠なものというのがわたくしの信念です、友好の永遠を」と述べ、会場から両省・県の首長に、なりやまない拍手が送られた。

それは神奈川県と遼寧省との平和友好の新時代を告げるものであった。

このあと、会場を移し、省楽団の演奏会を鑑賞した。舞台が、県立音楽堂だったら、音響効果も、もっとあがっていたであろう。クラシック音楽、ときに日本の民謡も入れ、すばらしい音楽会であった。

わたくしは、聴衆の動きを知りたくて、あえて団体から離れ、会場の最後列の角に席を取った。案内係からぜひ招待席へと促がされたが、断った。会場後半部には高校生・大学生それに軍人の若者が多かった。彼らは、静

かに聞く耳をもっていたが、クラシックになると、少しざわつき始めた。この点、日本の若者と共通していた。途中、席をたつて、ジュースを買いた行くもの、隣りの友人に話しかけるもの、さまざまである。よかったとおもった。ある記者から、「先生はいつ新聞記者になったのか」と批判を受けた。

とにかく一三日は、一日中が密度の濃い日中友好の行事であった。友誼飯店に帰ったのは一〇時過ぎである。知事は元気そのものである。「清水君も元気ではないか」といわれたとき、「その通り」と答えたのは、瘦せ我慢であった。知事は文字通り、行政マンであり、政治家であると改めて実感した。安西さんも元気であった。記者諸君は、瀋陽烈烈であった。広い庭、花と緑に囲まれた友誼飯店の部屋に着いたときは、さすがに疲れた。だが明日の準備をして床についたのは夜一二時であった。直ぐに寝つかれない。知事があいさつの中で一部中国語で話した言葉、ツォン ナン ホア カイ（春暖花開——「暖かな春、花咲きはころぶ五月」）チェイ ツァン ブー ドアン（取長補短）の言葉がほうふつとして出てくる。寝床でも、友好の熱は増幅する。音楽会場の売店で秘かに買った七〇〇ミリリットル、二四〇円の中国酒を、コップ一杯飲む。やっと酔ったいきおいで休む。

④ミス白山号について

一四日、昨晚熟睡四時間、午前五時三〇分起床。六時三〇分朝食、七時ホテル出発。この日はすべて、誰れよりも早く行動した。二四〇円の安酒で熟睡したせいなのか気分は壮快である。宇野さんが「先生早すぎませんか」と冷やかされる程、この日は心地よかった。

午前八時、瀋陽駅発、大連行の軟座車に乗る。

途中の車内で、暫くぶりで知事と話をする。「東北アジア経済協力のこと」「世界経済の中で日本経済のあり方」「地方自治体の自己革新のこと」とこちらも自由に話す。知事はいつもわたくしと話するとき、聞き役である。

ときどき鋭いコメントをする。こちらも、ときどき厳しい問題点を出す。東北アジアの安定した平和を着実に築くための政策について一致した。こんな雑談をしているうちに大連駅に着く。

車中、昨日、午前一〇時頃から二時半の間、私たちと別行動を取った記者たちから「自転車工場」の話を聞いた。

中国へきてから、あちらこちらで自転車利用の群衆に会った。老いも若きもゆったりしたペースでペダルを、こぎ、日本人のように猛スピードで追い抜く人はいない。中国はまさに自転車王国である。記者の話によると、この市の自転車工場で、最近人気を集めたのが、「白山小姐」（パイサン・シャウチエ、ミス白山号といったところ）で、この自転車の技術指導をしたのは、県が一昨年派遣したミヤタ自転車工業のOBの高島信治さんである。女性の体型に合わせ、デザインされたのが市民に受けたようである。ことは二〇万台を量産する予定であるという。この自転車を作った瀋陽自転車工場は従業員五千人、年間百万台を生産し、一部をアメリカや東南アジアへ輸出しているという、県の技術者派遣制度が成功した典型的な事例であろう。

自転車の技術にかぎらず水道技術、公害防止技術などについてもかなりの成果を収めているようである。それは、日中交流の段階から共同作品の段階に入っていることを示している。

⑤ 港湾都市、工業都市、生活都市としての大連

五月一四日、午後二時三〇分頃、大連市に着く。大連市の幹部・市民の歓迎をうける。

駅前には、混雑し、自転車に乗った人の群である。また駅前で目立ったのは、建設中の四〇階の数棟の高層ホテルである。「日立」、「丸紅」といった大手企業の看板もある。

大連は、港湾都市である。港湾は上海に次ぐ中国第二の規模を誇っている。貨物量は、約四〇〇〇万トン、輸

出港としては上海港を上回る。年間三〇カ国以上の一千百隻以上の船が寄港している。私たちが港を見学したとき、アメリカの船、ソ連の船、日本の船が接岸されていた。

大連と横浜との船便（貨物を含む）は週四便もあり、成田―大連間の空の便も、六月一日から全日空が週五便を出している。今後交流はより深まるであろう。現在和尚島に五百万トンの石炭ベース五基を建設中であり、二〇世紀末には、八〇〇〇万トン以上の荷物を取扱うという。このうち七〇％が外国との貿易で、うち日本が四〇％を占めると予想されている。

大連は工業都市でもある。造船、鉄道車輛、化学工業、製鋼、石油の中国の大手工場があり、生産品の八〇％が国内向けである。いま活発な生産を誇り、年間平均一〇％の成長率である。

大連は、観光・漁業都市でもある。わたくしたちが北京副市長に案内された海岸公園は、景色もよいし、漁貝類も、豊富であった。それは昼食のとき、ナマコ、アワビ、エビ、こんぶ、貝、タイ、イカ、カニなどの料理を出されたときはびっくりした。大連カニは別として、養殖技術も中国一らしい。漁獲量は四〇万トン以上で、輸出もかなりしているようである。

大連はまた、全国的にも、果物の産地で有名である。リンゴ、桃、スモモ、ブドウ、サクランボ、ナシも出荷し、リンゴは、中国全体の五分の三を占めるという。「リンゴの里」ともよばれているようだ。

大連市は、一九八四年九月に沿海開放都市として、国務院から承認された。開発区推進のトップランナーになった。開発区は、市の中心部から東北へ三三キロメートル、金馬橋子村一帯に位置している。黄海に面した敷地二〇平方キロメートル、本世紀末を目指して一五万人の労働者、技術者、経営者、の工業団地を計画している。

これが「大連経済技術開発区」である。

開発区の目的は、広大な東北経済圏（遼寧省、吉林省、黒竜江省と内蒙古自治区東部のいわゆる「三省一区」）の対外経済・文化などの窓口になり、遼東半島の老大な資源と、導入される外資・技術を結合させ、新しい大工業の発展にあるようだ。この地域に行って驚いたのは、ピラミット型のホテル、中・高層ビル、多目的のホールが立っていたことだ。

英語がたんに、技術者である副市長はこういった。「とくに技術・知識集約型の産業で、省エネ、低公害産業の誘致をめざし、電子、精密機械、新素材・高級紡織・食品飲料などに重点をおく、すでに合弁・合資プロジェクトには税制優遇措置も決ったという。

このためにインフラ（産業基盤整備）もかなり進んでいるという。工業区では、六万六千ボルトの変電スレーヨン（三菱電機との協力）が送電を開始しているし、給排水も完備し、上下水道、排水、浄水場（給水能力日量五万トン）も整備されつつある。行政生活区には、液化ガスを利用し、年五六〇〇トンの集中ステーションを設け、集中式給熱ボイラーはもちろん通信のネットワークとしては、四〇〇〇回線の交換機（スウェーデン製）を設置しつつある。九六〇ラインのデジタルウェーブ通信システムも設置され、国際通信ネットワークに接続するとのことである。その他病院、学校、大学を計画中である。さらに、開発区を案内した秘書は「いま外国の企業三〇社と商談中で、うち一〇社が日本であるという。一九九〇年前までに進出すれば、土地代一割引、製品の五〇％を五年間輸出した場合、土地代は無料という。七〇％以上の製品輸出の企業には、法人税も控除する」といていた。私は開発区の小高い丘で、こうした副市長以下秘書の方の説明をききながら、考えた。中国の開発区は、社会主義の論理のもとで、積極的に市場経済にふみ切ったという点である。この点では、内陸部と開発区の経済格差

も認め、開発区でえた富を内陸部に再分配する政策を展開していくという方式におもえてならなかった。

⑥大連開発区の企業導入法を考える

ここで、ちなみに、開発区法規規定の一部を紹介し検討したい。それは外国企業を導入することを前提にした、さまざまな条件の法規である。

この法規は、開発区の現場の技術主任からいただいた資料『大連经济技术开发区法規規定汇编一』（一九八七年）に基づくもので少し法律論に入るが、辛抱して読んでほしい。

本条は制定の目的をこう書いている。「第一条、対外的な経済技術の協力と交流を発展し、社会主義近代化の建設を促進するため、『中華人民共和国憲法』と関連法律・法規の規定にもとづいて、本条例を制定する」と。

ここで注目したい点は、「社会主義近代化の建設を促進する」という内容である。それは一言でいうと、社会主義における生産力を高めるために工業化を積極的に建設しようという思想を示したものである。というのは、いま中国は、経済の発展水準が低く、人民の生活水準を高めるには、工業も農業も生産性を高めなければならないという状況におかれている。社会主義近代化とは生産力を発展させるという一語につきる。中国政府は、二〇〇〇年までの約十二年の長期構想を示し、生産四倍計画と一人当り所得八〇〇から一〇〇〇ドルを目標としている。ここに目標において社会主義近代化の建設を条文に規定したものとおもう。

このために、第三条でこう書いている。「開発区は中国経済特区の政策と新型管理体制を実行し、大連と東北地区の優勢を利用し、先進的な技術・設備の導入と科学的な管理経験との結びつき、対外導入・対外連合との結びつきの原則に従って、計画的に、段取りを追って新興産業を設立し、新しい技術・製品を開発し、外向型経済を発展して、大連・東北地区ないし全国の技術の進歩と経済の繁栄のために服務する」と。

ここで明らかなことは、第一に新しい自主的管理体制を多様性をもって実行すること、第二に外国資本の導入と合作経済を計画的に実行し、先端技術産業を設立し、対外貿易に強い経済体質を作り、実践すること、第三に大連・東北地区のみならず、全国の技術の進歩と経済の繁栄のために努力することの三点にある。つまり開発区の経済発展は同時に全国の経済発展と連動するという考え方に立っている。さらに第五条、第六条では、投資者の合法的権益の保護と労働組合の権利を保証している点でユニークである。

行政管理については、第八―十一条に規定されている。ここでは、管理委員会が、計画の制定、国の法律（社会主義法）による行政管理、公共施設の管理、輸出入業務の管理、開発区の教育、科学技術、文化、衛生、体育、その他の事業の設立と管理さらに金融部門の管理などを規定している。これは当然な論理的規定である。それは、具体的に運営するにあたっての細則を必要とするのである。社会主義的近代化とは、原理的には、資本による労働の搾取・収奪関係を取り除き、労働による資本の公共的管理でなければならない。この基本的原理を打ち出している点で、評価してよい。

第三章「投資と経営」では第十二条から第二十二条まで詳しく規定している。

第一に、開発区は、次の条件の一つに合った生産的項目を重点的に設立する。

(1) 生産工程と製造技術は、国際的水準のものであると同時に国内のニーズに基づいた至急に必要なもの。

(2) 製品輸出を主とするもの。

(3) 製品の輸入代替品のもの。

第二に、第十三条で、開発区の投資と経営は次の方式を取ることができるとしている。

(一) 中国と外国（以下中外）との合資経営企業

(一) 中外合作経営企業

(二) 外資企業

(三) 国内の独立経営企業

(四) 国内の連合経営企業

(五) 補償貿易（バーター貿易）

(六) リース

(七) 中国の法律によって許可されるその他の方式

ここで注釈を加えておく。「合資経営企業」についてみると、開発区に進出する外国資本は、最低二五％を出資し、中国と外資とが共同で出資し、出資比率に応じて、管理、利益分配、リスクを分担するというものである。合作経営企業とは、外資側が資金、ソフトウェア、機械、技術を提供し、中国側が土地使用権、建物、資源開発権などを提供する方式である。合作経営企業の条件および管理方式は両者の話し合いで決めるといふ。「合資経営企業」はこの原理に基づいて多様性をもって経営する方式である。

これは、従来の社会主義国の外資共同経営方式と違っている。日本のある社会主義経済学者は、社会主義国は、資本主義国の技術やノウハウを導入するが、資本は導入しないという。それは、搾取を意味するからであると。だが、彼自身、社会主義の概念を、一元的に解釈し、それを現実には強引に適用していることが、いかに、まちがいであるかを、いまは自覚しているようだ。問題は、外資を、その国の人民の生活向上にどのように利用し、発展させるかである。従来の一部の社会主義者は、自らのおかれている立場を考えず市場経済導入は資本主義の復活であると公式的に考えていた。こうした意見に対して、中国の外資導入方式は、教訓になるであろう。

日本の一部の社会主義経済学者は、ソ連のペレストロイカ、中国の開放政策から何を学び、先進国における社会主義像をどのように構築したらよいのか、現実を踏えて主体的ビジョンと理論を示すべきではなからうか。

中国政府内部においても、計画経済と市場経済の結びつきについての複数の意見があった。

開放政策が今後、具体的に、中国人民の生活の発展をどのように具体的にしていけるかの展望を示して欲しかった。計画経済に市場経済を正しく組み込めば社会主義近代化は成功するであろう。中国自身が、自らの方式で、人民の生活の向上と安定のために、開放政策を選択したことを評価したい。

⑦外国企業の優遇措置について

少しくどくなる。だが、社会科学的論評は、単なるフィードリング的評論ではなく、理性に基づいた現実の自己認識を踏えた評論でなければならない。

問題を進めよう。

大連での仕事も目まぐるしく忙しかった。繰り返しになるが、大連市は遼東半島の玄関にあたり、都合都市であり、未来の都市でもある。わたくしは、大連の現実を見ることから出発し、大連のまち作りが開放政策とどのようにかわって展開されているか、二十一世紀を目指してどんなまち作りをするのかに興味を持っていた。とにかく大連の開発区は、着々と成果を収めている。その政策にどうしたらお手伝いできるかを考えさせられた。それには、研究者として大連開発区の工業化―近代化の原理を開発区の「法規」を紹介しつつ、コメントをしたとおもった。というのは、おこがましいと思ったが、大連の副市長からの要望でもあった。いまや親善から合作なのである。

さらに続けよう。

日本の企業家にしろ、その他の外国の企業家にしろ、利潤を最大の原理としている企業にとって中国への進出は、果して大丈夫かと危惧するようである。この点を、中国側は、すべて調査済みである。外国の企業が社会主義の近代化に協力する限り、外国企業を優先するというのである。つまり中国人民の利益になれば、外国資本の導入について、できるだけ便益を与えようとするのが中国の立場である。「法規」は中国の社会主義の近代化―工業化の路線を原則として展開されている。この点、従来のソ連、東欧にみられない内容であるとおもう。最近、ソ連、東欧も開放政策を選択するようになった。これは中国から学んだのではなからうか。

こうした問題意識に立って、わたくしの推測であるが、第四章の外国企業「優遇」措置が規定されたのであるうと思った。それは、第二十三条から三十五条までの条文の中に示されている。きわめて実務的な内容であるが、敢えて紹介する。

第二十三条では、こう規定している。「開発区の外国企業は、一五%の税率で企業所得税を納付する。そのうち、経営期の一〇年以上経過した企業に対しては、開発区の税務機関の認可を経て、利益をあげた年度から起算し、一年目と二年目は企業所得税を免じ、三年目から五年目までは企業所得税の半額を納付する。

輸出企業は、前項規定に基づいて企業所得税の減免満期後、当該年度の企業の輸出製品生産額が同年の企業の製品生産の七〇%以上に達した場合には、一〇%の税率で、企業所得税を納付する。先端技術企業は、前項規定通りによって、企業所得税の減免満期後、一〇%の税率で、企業所得税を納付することを三年間延長することができる」と。

法人所得税一五%というのは、優遇措置である。先進国の法人税率を見てもわかるように平均三八%以上であるから中国の法人税は優遇措置である。わたくしの調査によると、中国でも、一九八四年以前は、三〇%である。

「法規」は外資企業への優遇措置を具体的に規定しているのである。

その他、外資企業の欠損の補償、納税負担の軽減措置（第二十五・六条）を規定し、さらに「外資企業は七年後に地方税を免除する」という。

こうした外資企業に対する優遇措置によって、中国の財政および国民経済が、どのように増大し、それが中国国民の利益になるかを統計的に説明するとより説得力をもつ。

さらに第二十七条では、外国企業への優遇措置をこう規定している。「外国の商社・商人はその投資した企業から分配された所得税納付後の利潤を自企業または開発区その他の企業に再投資して、経営期が五年以上になる場合、再投資部分の納付入済みの所得税の四〇％を還付することを得、開発区内の輸出製品企業または先進技術企業に再投資する場合、その再投資部分の上納済みの企業所得税の全額を還付し、経営期が五年未満でその投資を引きあげたときには、還付した企業所得税税金を返還しなければならない」と。

要約すると、外国企業が五年間、納税後の利潤を再投資し、同区内の企業に再投資した場合、所得税の四〇％を還付するという。さらに同区内の輸出企業または先端技術産業に再投資した場合、納付した企業所得税全額を返してくれるという。すなわち再投資優遇措置である。ただし、五年未満で投資をあきらめたときは還付した税金を返さなければならない。

一九八四年五月までは、法人所得税は三〇％であった。その後半分になったので、外国企業は投資しやすくなったといつてよい。ちなみに、香港では、八四年四月から、法人税一八・五％、個人所得税一七％に、それぞれ二％引き上げられたというから、この限りにおいて開発区へ外国企業の進出が香港より容易になった。一九七九年から八四年六月までに中国への資本投資した企業は一八〇〇件であるという。

第二十九条を要約すると、開発区内の企業の持ち込む建材、生産設備、原材料、部分品、元部品、交通工具、事務用品の輸入は関税と商工統一税（製品税または増値税付加価値税）を免除する。

第三十条を整理すると、原油・石油製精および国の規定した商品を除き、製品の海外輸出は、関税と商工統一税を免除するという。

第三十二条では土地の使用について規定している。第三十三条ではインフラ（工業用地、上・下水道、道路などの施設）の使用料について規定している。「外国投資企業に対して、建設と生産に必要な水・電気・運輸の条件と通信施設を優先的に提供し、大連市国営企業並みの料金でその使用料金を徴収する」という。その他送金についての所得税減免措置などを規定している。

さらに別の独立した規則として、各企業のニーズに応じた労働者の自由雇用・労働契約・労働規律・労働契約の解除規定、労働契約の内容（任務・報酬・期間・労働保険福祉・契約の違反の責任など）などを盛り込んでいる。

一方、「土地使用管理規則」をよんで、一貫していることは「土地の使用権」の運用である。すなわち「売買・貸し出しまたはその他の形式で土地を不法に譲渡することを禁止」している。この点社会主義の特徴を示しているとおもう。資本主義では、土地の所有・非所有が問題であり、とくに日本での土地騰貴が中・低所得者の生活を妨げていることを考えると対照的である。ところが中国は土地利用権を中国人民のために生かしている。さらに規定を見よう。土地使用者は、「土地使用証書を受領した日から九カ月内に、開発区管理委員会の認可の総体設計に従って起工しなければならない」という。これは当然の規定である。

「土地使用管理規則」（法規規定汇编、四四ページ）第八条によると、土地使用契約の規定によって、毎年土地使用料金を納めなければならない。土地使用料金の基準を示している。

生産用地は一等地一平方メートル七元（三三八円）、二等地同六元（二〇四円）である（ただし一元三四円の計算）。非生産用地は一等地一平方メートル十元（三四〇円）、二等地同八元（二七二円）である。日本の土地利用と比較しても格段に安い。

外国の商社が投資して作られた輸出企業と先端技術企業の土地使用料は、「使用証書」を受けとった年度から五年間土地使用料を免除するとある。さらに「教育・科学研究・文化・医療衛生の用地については、実際の情況に従って、土地使用料を軽くする」という。

大連開発区の周海斐副主任はこうした内容に基づいた企業進出状況を説明した。すなわち、現在進出企業は三十一社、国別では、アメリカ一〇社、日本五社（大阪の高級毛皮製造業のエンバなど）カナダ、イタリア、インドネシア各一社で、残る十六社は香港と台湾の企業である。いま日本の企業五社と商談中だが神奈川の企業は含まれていない。神奈川の企業を歓迎する、といていた。

いま認可権限も、三千万ドル以下の企業の投資については中央政府から大連市に認可権が与えられている。一方長洲知事は「分権体制の方が発展する。今後、県が窓口になって、県内の企業が参加できるようお世話したい」と語った。

県内の企業の進出の場合、問題がある。有力企業は、本社を東京におき、中国との合併事業に踏みきるには、本社の承認をえなければならないからである。中堅企業でも、ある社長はこういつていた。「人件費が安いのは魅力的だが、製品の輸出義務があること、水・電力の未整備、原料調達の問題などがあること、これらを解決しなければならない。にも拘らず協力したい」と。

大連は古いアカシヤの並木道のあるまちで有名である。そのほか、まえに触れたように港のまち、人間のまち、

そしていまこうしたまちを包んだ新しい社会主義近代化のまちである。大連の一日は、早く過ぎた。市長と市民は二十一世紀を目指したまち作りに燃えている。知事が、「活力と魅力のあるまちづくりを期待したい」と。この別れのパーティーでの言葉が印象的であった。さらにそのとき知事は科学技術と三十年先の友好に青少年の交流の重要性を強調した。魏富海市長は「是非若ものの交流を实らせたい」と応答した。

五月十四日の夜一〇時頃、南山賓館の自室で休んでいるところに同行した新聞記者団の代表宮崎淳二氏から電話があった。「こんどの大連開発区についてどうおもうか」

そのときこう答えた。「日中友好は実務交流の時代を迎えた。遼東半島の経済が向上すれば自ずと朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）や韓国との経済交流も活発化し、朝鮮半島の平和安定に寄与することになる。発電などのエネルギー不足をどう解決するか、教育の向上をどう図るか、技術面での立ち遅れはどうするか、など中国の課題は山積している。だから日中の技術・経済協力は不可欠である」（『東京新聞』一九八八年五月二五日）と。わたくしは、神奈川と遼寧省の新しい友好時代を、ひとりの参加者として期待をしている。

五月十五日、午後、四時一五分の民航機に乗って、一七時三十分北京空港に着いた。ホテルへ行く途中、市内のレストランに寄って夕食を済ませ、二〇時三〇分に、北京飯店に着く。明日の帰国の準備に追われる。

五月一六日、安西さん、吉村さん、記者団は、朝五時に南京行の航空機に乗る。ここで別れた。楽しい旅であった。朝六時三〇分起床、七時三〇分朝食、八時三〇分ホテル出発。市内の自由市場と国营市場を見学。一六時、知事と秘書の三人で、北京空港五時三〇分発のJAL七八二便に乗り二〇時に成田に到着した。

⑧ 日中友好提携を深めよう

最後になった。改めて日中友好の意義を考えたい。訪中のあいだ、「奥野発言」が気になっていた。いま、な

ぜ、「日本の中国侵略戦争を美化し、正当化するのか」「閣僚の靖国神社訪問をどうして、正当化するのか」疑問に思っていた。訪中のあいだ、一連の会議、シンポジウムを通じて、中国のひとは、この問題に一切触れなかった。非公式のときにも触れなかった。彼らは、怒りをおもてに出さなかったのかも知れない。わたくしはたえず気になった。五月一二日瀋陽市の友誼賓館の新聞台においてあった『人民日報』（一九八八年五月二日第六版）の国際版を見た。そこには「奥野究意想幹什麼？」という見出しを見た。「奥野は、一体何をいわんとするのか」と同時に「日本の野党が奥野氏の罷免を要求している記事」も、載っていた。この翌日、竹下首相が奥野国土庁長官を罷免したニュースをテレビでみて、当然のことだとおもった。

だが、奥野発言の背景には、日本の経済大国のおごりの中での日本人の優越意識、対外的権威主義・技術サービス優越主義がある。この点で、新しい国家主義の台頭ではないかとおもった。決して軽視してはならないのではないか。もう一度一九七八年の八月十二日、北京で調印した日中平和友好条約を想起してどうか。その第一条は、こう規定している。「両締約国は、主権及び領土保全の相互尊重、相互不可侵、内政に対する相互不干渉、平等及び互恵並びに平和共存の諸原則の基礎の上に両国民の恒久的な平和友好関係を発展させるものである」と。この原則を、いまの政権政党が約束しておきながら、その閣僚の一人が、いまになって「侵略戦争」をなぜ美化するのか、狂った発言でなくてなんである。日中平和友好条約の精神に反することは当り前である。

当時の日中平和友好条約について考えた。条文には過去のこと、日本の侵略についての反省の条文をなぜ入れなかったのか。それは、中国側がゆづったと聞いている。その代わり、第二条で、それを含めて規定したものとされる。「両締約国は、そのいずれも、アジア・太平洋地域においても、又は他のいずれの地域においても覇権を求めるべきでなく、またこのような覇権を確立しようとする他のいかなる国又は国の集団による試みにも反

対することを表明する」と。このところ奥野発言にしろ、日本の防衛費G N P 一％枠突破にしろ、さらに瓦防衛長官の「防衛費増額論」などの発想は、アジアに対する脅威でなくてなんだろうか。奥野発言は第二条の精神に反するものといわなければならない。

わたくしは、ここで、誇りにおもうことがある。神奈川県と遼寧省とが、自治体次元の友好提携において、全国では初めての日中「不戦の誓い」を盛り込んだことだ。一九八三年九月一二日の両県省の「友好提携協定書」を重視したい。この協定書は、日中共同声明と日中平和友好条約の原則を遵守し、両県省の相互理解と友好を増進し、繁栄と発展を促進するため協議を尽し、正式に友好県省として提携することを合意するとある。

双方は、人の相互訪問及び経済、貿易、科学技術、文化、体育など各方面の交流を通じて、両県省の友好関係を強めることを取り決めたとある。こうした前提に立って、次のような「不戦の誓い」を示した点にある。

「日本国は過去において、戦争を通じて中国人民に重大な惨禍を与え、また日本国民にも不幸をもたらした。

神奈川県と遼寧省は、日中両国民は決してふたたび戦争を行わず、両国民の子子孫孫の友好を増進し、平和友好関係を維持・発展させるよう共に努力することを厳粛に表明する」と。

この声明は、民際外交の典型的事例である。すでに県は、合計二十一人の技術指導員を派遣、自転車・製缶などの工場で設計、品質管理などの指導協力をしている。その外スポーツ、児童画展、公害防止技術などの分野で相互派遣を通じて、草の根の、日中友好を築いている。県レベルの自治体外交の真髄を発揮している。

わたくしは大学人として、県下の大学人が遼寧省の大学とどのようにに交流するかがこんごの課題であると思う。わが「経貿研」の四名の研究者が経済学部教授会の承認のもとに訪中した意義を改めて確認したい。日中友好こそ今後のアジアの平和創造の基盤になるとおもった。

最後になったが、五月の連休に、訪中した意義をいま噛みしめている。学生には帰朝講義もした。中国の「こ
とわざ」(諺語「イエニユイ」にある「不経一事、不長一智」(ブーチン、イーシブチャン イーチ、一事を経験しなけれ
ば、ひとつの知恵は生れない)の言葉をもって結びとしたい。つまり日中学術交流の現地での経験をして、はじめ
て新しく知恵が生れるのであると。(一九八八年七月二十日記)